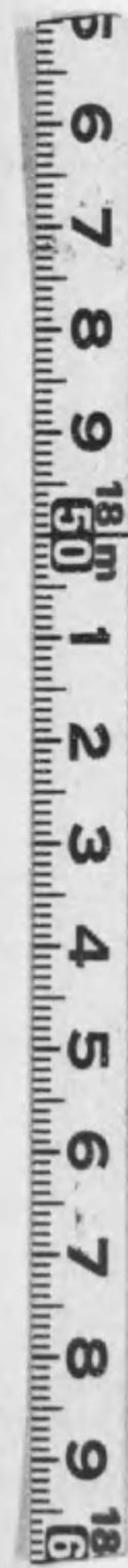


特116
698



始



特116

698

張良

羅生門

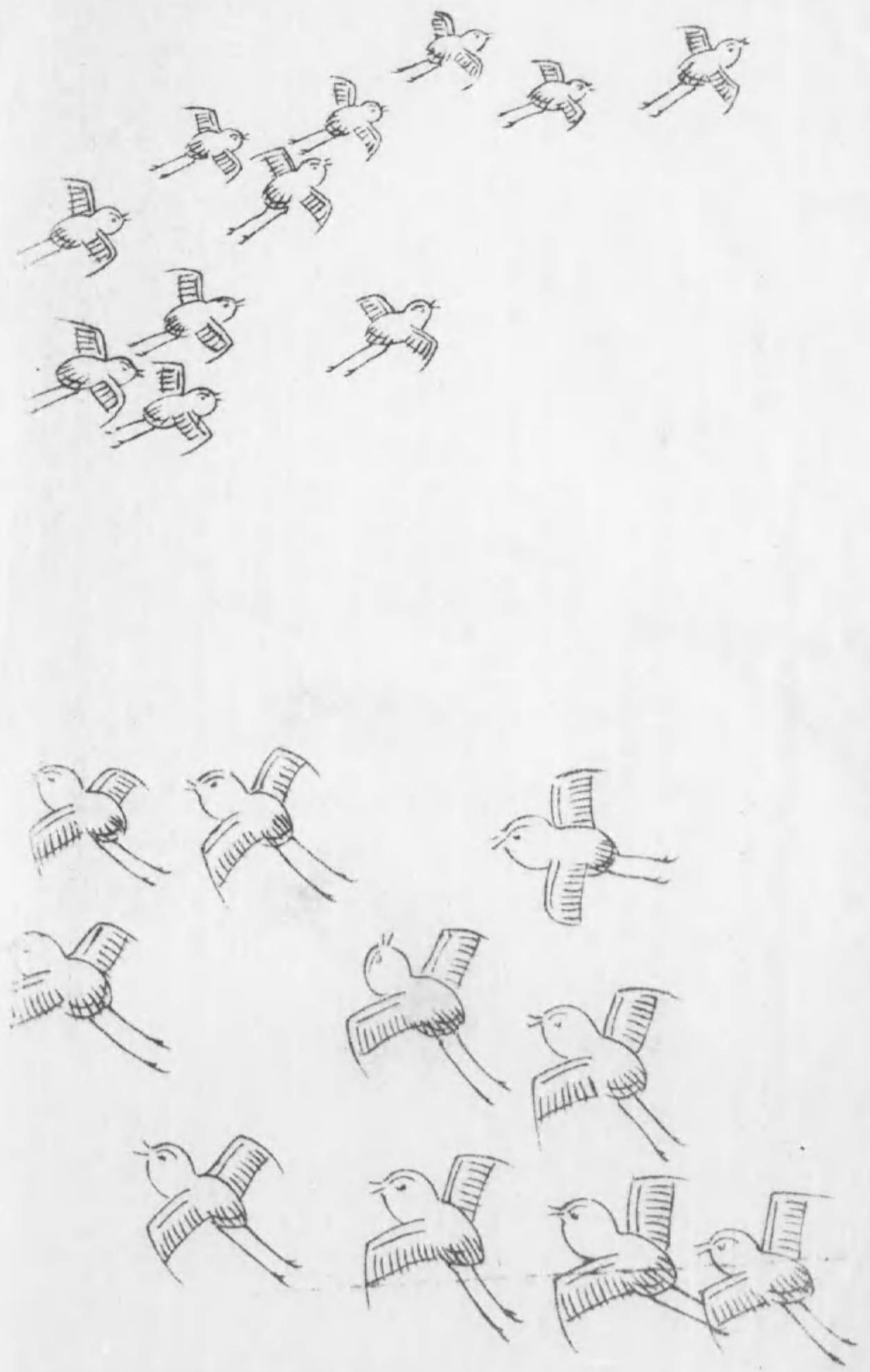
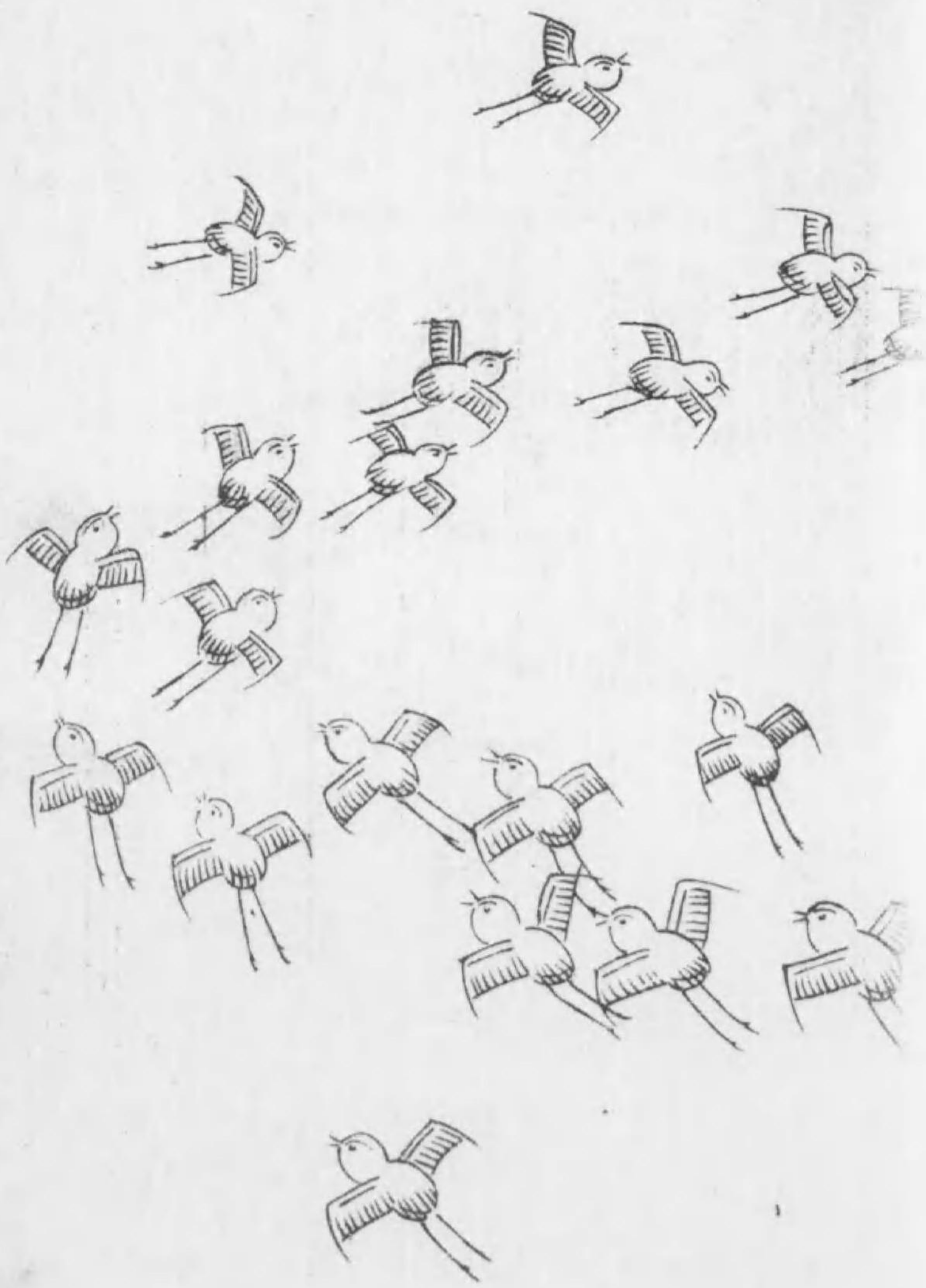
鐵輪

藍染川

雲雀山

觀世流改訂謄本

外五



觀之清
世之長

張良

解題

張良下邳の圯上にて黄石公より兵法の奥義を授けられたる故事を作れり。古き別名を現在張良といへり。過去物の別曲ありしにや。能本作者註文及び二百十番諸目録に小次郎作と傳ふ。

諸ひ方梗概

凛として位大きく、健實を旨とし、一種神祕的の氣韻飄渺たるものを含む。

シテ

前は老人なれば聲を上にと取らず、稍抑へてどつしりと靜に扱ふ。「あら遅なはりや」云々の出は怒氣を含めるおももちにて強みに確りと諸ひ起し、詞はさらりめに取り、「はや其時刻も杉の門」と稍かゝつて確と地に渡す。後軍略を傳ふる神仙なれば十分に聲を張りて堂々とあるべく、威嚴を有ちて弛み無かるべし。「そもこれ」の出は大瘧物なれば大きくどつしりと諸ひ起し、「こゝに漢の高祖の臣下」云々の詞。強々と言ひ、「賢才人に越え」云々を乗つて確りと地に渡す。以下地との掛合は鷹揚に嚴しかるべし。「いかに」云々の詞はワキを眼下に見る程の態度にて位を持ちて確りと言ひ、「あつばれ」は稍靜に強く出で、どつしりと諸ひ起し、「思ひながら今一度」と少し心してカトルを確りと諸ひ止む。「石公馬より」云々は靜にゆつた大

「其故なきには似たれ」も「さらりと、其後を再び確りと言ひ、「兵法の師といはれんと」と確りとかゝつて地に渡す。後は前よりも勢ありて確りと、「瑤臺霜滿てり」云々に凄然たる山峽の曉色を諸ひ表す。「其時張良」云々はつゝましやかに言ひ、「張良願がす」云々は前とは別に、落着ありて確りと出づ。

ワキ

ワキ方の重き曲なれば、十分に位を持ちて大事に扱ふものとす。名告は堂々と言ひ、以下の詞確りとあるべし。進行も亦稍慎重に諸ふ。次の詞「言語道斷」はかゝつて出、「又われながら」云々を確りと

「其故なきには似たれ」も「さらりと、其後を再び確りと言ひ、「兵法の師といはれんと」と確りとかゝつて地に渡す。後は前よりも勢ありて確りと、「瑤臺霜滿てり」云々に凄然たる山峽の曉色を諸ひ表す。「其時張良」云々はつゝましやかに言ひ、「張良願がす」云々は前とは別に、落着ありて確りと出づ。

地

初の上歌「待つかひもなし」云々はシテの氣を承けて確りと靜につけ、「來らばわれも又こゝに」を特に確りと扱ひ、「後れ給ふな張良」とかゝり、「怒をなして老翁は」を前へかけて出、止めの返しを鎮めて中

入に諸ふ。「思ふ心を見ん爲と」の上歌は一の地よりもさらりと勢よく扱ふが宜し。「有明の」云々は確りと出で漸次に少しづつ運びをつけ、「うれしや今ははや」と聊心持してさらりと、「思ふ願ひも滿つ汐の」と締め、其後

13.9.25
内交

を稍靜に確りと誦ふ。シテとの掛合はシテと同じ位にてごつしりと承け、「敵を平らげ」より乗つて氣をかけ、終の「待ちのたり」を大きく扱ふ。「はいたる杏を」云々は初の一句を確りとつけ、返しよりさらりとなり、「落し給へば」以下位進みて勢よく扱ふ。されど音聲亂れず又は節の崩れぬやう注意あるべし。「ふしぎや」云々はかゝつて出で返し以下勢よく烈しきやうに誦ひなす。「張良驢がす」云々は承けて弛みなく運び、「石公馬より」云々は聊か寛りとつけ、「また彼の大蛇は」より位を進め、「攀ち上れば」の「れば」にて鎮め、「石公遙かの高山にあり」云々と稍靜にむつくりと扱ひ、「忽ち姿を黃石とあらはし」とか、つて大きく、止めを確りと誦ひ納む。

辭解 漢の高祖 支那前漢第一世、張良 字は子房、張平の子、父祖は韓國の相たり。韓、秦に滅さ

も中らず、卻つて索めらるゝ事急なりしかば、密に名を更めて逃げて下邳に匿れ居たり。ある時下邳の圯上に遊びたりしに、一老父ありて、其履を圯下に墮し、張良を顧て、孺子下りて履を取り來れと命ず、張良愕然として之を駁んとせしも、其老いたるを感み、忍んで履を取りて履かす。老父笑ひて、孺子教ふべし、五日の後平明我と共に會せんと曰ひて歸り去れり。かくて五日の後、夜の明けんとするに往けば、老父已に來り在り、憤つて曰く、老人に後るゝは何事ぞと、更に五日の後を約して歸る。五日の後再び往きしも老父又既に在りて怒りて歸ること前日の如くなり。三たび、五日の後、張良まだ夜半の頃より往きて待つに、老父やがて來り、喜んで一編の書を與へ、此を讀まば則ち王者の師とならん、十三年の後孺子我を見ん、我は濟北穀城山下の黃石なりと曰ひて歸る。その書は乃ち太公兵法の書なり。其後張良高祖に屬し、高祖を佐けて終に天下を定め得たり。此事審には前漢書張良の傳、史記留侯世家などに見ゆ。公庭 公の場所、茲には朝庭又は公の勤め本曲は此事の國書に譯載せられたるものに基きて作れるなるべし。土橋 前漢書其他に下邳の圯とあるよに座列し。下邳 史記司馬貞の索隱に「按地理志下邳縣屬東海」と。土橋 前漢書其他に下邳の圯とあるよを圯と云ふ。兵法の大事 戰術の。やうく 音便。五更 寅の時刻、即ち今の午。時や遅き 速きや遅きといふ成語あるをかりて、或は時の遅きならんかと思ひ煩ふ意にとりなす。遅なはりや 遅きこと。杉の門 新古今集に「いはで月日の

により、時刻も過ぎの意を杉にかけ、杉と云へるより更に松を出して待つに云ひ掛く。言語道斷 言語に絶せる意、瓔珞經に「言語道斷。心行所滅」。以ての外の機嫌 茲にては以ての外。ゆくへも知らぬ御事 素性もわか。末世 後世。心を見ん爲 心をため。瑤臺 霜滿てり 和漢朗詠集に出でたる賦「瑤臺霜滿、一聲之玄鶴唳天、巴峽秋深、五夜之哀猿叫月」を引き、もある山地の名。五夜は一夜を甲乙丙丁戌の五つに分ちたる稱呼の第五夜。有明の月 夜の明くる頃までも空。隈なき 月の光行き渡りて陰隈は陰。山のかひ 山と山の間。渡る橋に 新古今集の歌「鵲の渡せる橋におく霜の白。滿つ汐の願も滿つると云ひかけ、滿潮の朝の意にて曉とつゞく。黃石公 彼の老人自ら黃石なりと名のり、又後張良濟北を過ぎしに、穀城山下はせ。君臣を重んじ 君臣の義を重んじの意。賢才 賢徳、才智。太平記に「賢才の譽れ」などあり。天道に 其志の天上界の諸佛にして兵法の大事を授くとの意。佛敎は後漢の明帝の時始めて支那に傳はりたれば、茲に佛敎に關する事を出せるは時代を考へずしてみだりに筆を下したる如くなれど、もと誦ひ物としての作なれば咎むべきにあらじ。

いしくも 殊勝にも。あつばれ 歎美する時。器量の人體 才器徳量の。巖石いはほに 訝しき辭。巖石と句切りて。たまらず 得ず。面もふらず 脇見も。善哉 俗に「でかしたり」。祕曲 音樂技藝めて容易には傳へざる曲にいふ詞なるを借りて兵法戰術の上に應。口傳 他見を懼るゝ、祕事を文字に記さず口用せり。穩當ならざる辭なれども深くあげつらふにも及ばじ。觀音 觀世音の略。大勢至と共に阿彌陀佛の脇士にして慈悲を本願とし、衆生濟度の方に屬する祕事を書。觀音 觀世音の略。大勢至と共に阿彌陀佛の脇士にして慈悲を本願とし、衆生濟度の方に屬する祕事を書。觀音 觀世音の略。大勢至と共に阿彌陀佛の脇士にして慈悲を本願とし、衆生濟度の方に屬する祕事を書。觀音 觀世音の略。大勢至と共に阿彌陀佛の脇士にして慈悲を本願とし、衆生濟度の方に屬する祕事を書。

れば、假にその蛇體を觀世音の化身として作れるなり。再誕とはこゝには化身出現といふ程の意。雲居 天 黃石とあらはし 張良後年穀城山下に果して黃石のあるを見たりといふを含む。

裝束附

前シテ (黃石公)

面小牛尉阿古父尉朝倉尉、尉髮、襟淺黃、着附小格子厚板、茶水衣、緞子腰帶、尉扇。

後シテ (黃石公)

面老荷尉又は鼻瘤惡尉、白垂、唐帽子又は輪藏帽子、白地金緞鉢卷、襟淺黃、着附無色段厚板又前の着附にても、半切、袷狩衣、縫紋腰帶、唐團扇、卷物(懷中)。

ツレ (龍神)

面黒髭、赤頭、輪冠龍戴、赤地金緞鉢卷、着附厚板、半切、法被、紋附腰帶、打杖。沓(用意)

ワキ (張良)

着附厚板、白大口、側次、紋附腰帶、小刀、扇。

後ワキ (張良)

唐冠、金入鉢卷、着附厚板、半切、腰帶、扇、劍。

五番目 畧脇能

張良

九月

ワシテ 黃石公(前ハ老人) 張良

早行(位重ケ堂々ト)

此ハ漢の高祖の臣下張良也。我が事あり。あれハ庭ノ隙ニ身ヲ置ケル也。ある夜不思議の夢ヲ見ル。こゝろヨリ下邳ト云フ處ニ土橋アリ。其ノ土橋ニ何カク休リ所ニ。一人ノ老翁馬ニ乗リ行キ逢フ。其ノ者左ノ背ヲ背ル。

某の取つて履かせること何者か
あつた向ひなくさうらこの思ひ
どもあつた氣色だものさうも
老いたるや貴文親と思ひ皆を取つて
履かせるその時彼の者申さう。汝
誠の志ありけり。五日の當らし日
この事いふは女書も傳へか

ワキノ流儀ニヨリテ
道行ノ返シテ該ハ
メコトアリ

申して夢のめぬやうく一日を勘入
いへ。今日五日は相當りの程。誰か
下郡の主橋へと急ぎる。五更の天も
明けやけが。五更の天も明けやけが。時や
おそまゝと行く程。道は遙く山の端も
あつた。女渡れる川はや。下郡の主橋は
著きよひり。下郡の主橋よりさう

後よこ

畏れ後よこ。其おのちよら。彼たれども。

早ノ流儀ニヨリ
上歌ノ初句ヲワキ
ニテ謡フコトアリ

本事を傳へて来せよ。貴し。兵法の師と

いふべし。思ふ心や見ん為と。思ふ

心見ん為と。知れ。帰るも恨あり。又

こそ。こよ。来らぬと。勇みやありて。帰

けり。勇みやありて。帰るけり。けり。けり。

後早上 (凜トシテ位大キク)
外 (一声) 謡 臺霜満てり。聲の言鶴天よ。嘆く。

巴峽秋深し。五夜の哀猿。月よ。叫ぶ物

凄き。山路の。有明の。月も隈

なき。深更よ。月も隈。あま。深更よ。山の

岐より。目入。渡せ。處。下都の。川波よ。

渡せ。橋よ。あ。霜の。白き。や。見と。ぬ。ぞ

今朝。まだ。渡り。人の。跡も。あ。無

や。今。は。や。思。願も。満。朝の。曉。や。け

小 謡

長 良

白

地拍子
人影の
ミ

て。是。よ。夜。馬。の。鞭。う。ら。く。人。影。の。駒。を。は。や
 む。氣。色。あ。り。後。シ。テ。上。大。癪。打。上。抑。さ。れ。る。黄。石。公。と
 り。老。人。あ。り。何。静。ニ。ト。ウ。シ。リ。
 張。良。と。い。ふ。者。た。ら。ば。庭。を。見。て。君。臣。を
 重。ん。ど。義。を。全。う。し。て。心。猛。く。賢。才。人
 の。越。え。器。量。を。さ。ぐ。れ。地。國。を。治。め。民。を
 あ。ざ。め。む。志。天。道。は。道。と。て。忽。ち。よ

地。諸。佛。も。感。應。ま。の。あ。た。り。地。大。事。を
 傳。へ。て。高。祖。よ。つ。か。へ。地。敵。を。平。ら。げ
 身。方。を。い。さ。め。天。下。を。治。め。ん。は。か。り。こ。と。
 汝。は。傳。へ。ん。と。駒。を。は。や。め。て。事。り。終。よ。を
 張。良。と。い。ふ。自。奉。れ。ば。あ。り。し。は。變。れ。る。
 石。の。粧。ひ。眼。の。光。も。あ。た。り。を。拂。ひ。姿
 も。や。く。威。勢。を。怒。り。て。橋。も。と。よ

ハトト。待ち居たり。張良。

早く来たものか。必しお終

いものか。其時張良立ちあがり。

衣冠を脱ぎ。土橋を遙よ

ぞうむけぞ。あつたれ。器量の人體

か。おと思ひあがらも。今一度。心を見ん

と。石公ハ。履いたる。書を馬より。

●獨吟

(サラリ)

履いたる。書を馬より。遙の川よ。落

絵ハ張良ついで。飛んで下り。遠の

書を取ら。おま。おま。處ハ下都の。岩

石。おま。おま。おま。早き瀬の。

矢を射。如く。落ちくる。およ。浮きぬ。沈

みぬ。遠の。書を。取。おま。おま。おま。

おま。おま。不思議。や。川。浪。おま。おま。おま。

地拍子 遙の川よ
間ナシ
地拍子 遙の書を
間ナシ

大鼓頭 (セ)

地 初の上歌は更へて稍しつとりと出で、「ともなひ語らふ」より寛ぎたる心持となり、「とりとく」なれや梓

ひ起し、上端後を引き立て、さらりとあるべし。「網はしるしを」云々は確りとつけ、「立ち歸り方々は」とか、
り、以下順次に運びを附け、「これまでなりや」より位を進め、中入前を決然として立ち去る體に謠ひ納む。後
の「たけなる馬に」は網の謠を承けてさらりと運びよく、「春雨の」云々は合せて確りと出で、「俄に吹きくる」よ
り氣をかけて運ぶ。「其時馬を」云々はノリ地に扱ひ、初句を稍寛りと謠ひ切り、返しよりさらりと取り、「後よ
り兜の鏝を」と前へかけて大きく、其後位を進めて稍烈しく謠ふ。「かくて鬼神は」云々は改めて確りと出で、「其
たけ阜門の」の邊を鷹揚に「網を睨んで」と運びよく、「網は騒がす」以下勢よく謠ひゆき、終を確りと謠ひ納む。

辭解 花の都 帝都の美稱。櫻花爛漫たる都の意を。風も音せぬ 王充の論衡に「太平之世、五日一
風、十日一雨、風不鳴條」とあるを引き、諸謠曲に太平の世を祝ひて「風枝を鳴さず」と作れるよ。源の頼光 清和源氏の嫡流、満仲の子。
り、それを含みてこゝにも治まる帝都なれば風も音せずと綴れり。

源の頼光 清和源氏の嫡流、満仲の子。一條の五朝に仕へ、攝津、伊豫の守等を歴て左馬權守に任せられ正四位下に敘せられし人。驍勇ありて射術に
長けたり。或時弟頼信の宅にて宴を張りし夜、たま／＼捕へ置きたる鬼同丸といふ者縛を脱して酔ひ臥せる頼
光を刺さんせしも果さず、市原野にのがれ牛の腹にかくれ居たるを網先づ射、頼光やがて其頭を打ち落した
る事あり(古今著聞集)。又大江山に賊を退治し、土蜘蛛の怪を亡したることなど謠曲大江山、土蜘蛛に作られ
て人口に膾炙せり。丹州大江山 頼光四天王を引き連れて大江山の鬼神を退治したりといふ傳説。大江山は山城
なりとも傳ふ。貞光、季武、網、公時 いづれも驍勇を以て聞えし頼光の郎等なり。貞光は諸書に貞道とあ
るのことは、平家物語に「攝津守頼光の内に網(太平記には渡邊源吾網)、公時、貞道、末武とて四天王を仕は
れけり。中にも網は四天王の隨一なり」云々。今昔物語に「頼光の朝臣の郎等にてありける平の貞道平の季武」
の公時云々。古今著聞集に「網公時定道季武」など見えたり。また網の鬼を斬りし事は、或時網、頼光の用を蒙
りて夜深く一條堀川の辰橋を渡りける時、二十ばかりの美人網に向ひ、夜更けて恐ろしければ送り給はれとい

ひしより、綱うけがひて其女を馬に乗せ、連れだちて行く途中、女忽ち鬼と變じ、我が行く處は愛宕山ぞとば
かり、綱が鬚を掴みて乾の方へ飛び行きしかば、綱は鬚切の名刀を抜きて鬼の腕を空ざまに斬るに己は北野の
社の廻廊の屋根にござと落ち、鬼は腕を斬られたるまゝ愛宕の方へ光り行けり、綱其斬りたる腕を持ち歸りし
が、後彼の鬼網の養母に化して來り、斬られたる腕を奪ひ破風を破つて空を飛び行きし事、平家物語劔の巻に
出で、廣く人に參會 四海の安危は 和漢朗詠集に出でたる白居易の百鍊鏡の詩句に「四海安
知らるゝ所なり。參會 四海の安危は 危照掌内、百王理亂懸心中」とあるを引く。原句は太
宗智臣を鏡としたれば、四海の安さも危さも、百王(諸王侯)の治まり亂るゝも、一つとして暗きこ
と無しとの意にて、明天子の御代を祝し言へるなれば、こゝにも次句に續けて聖代を祝ふ文とす。曇なよさ
云 前引句の鏡を承けて出し、君の御影 久方の 空に冠す 七つの道 東海、東山、北陸、山陰、山陽、
(御影)は久しと言ふを久方にかく。久方の 空に冠す 七つの道 東海、東山、北陸、山陰、山陽、
道の末に續ける意を表とし、政道正しくして到らぬ隈なき 八洲 日本國 浪も音せぬ 太平の世に云ひ
意を陰に籠め、七道八州九重と數字を重ねて文の綾とす。八洲 日本國 浪も音せぬ 太平の世に云ひ
後拾遺集の序に「わが君天下をしらしめし 九重 帝都 面々人々 さしたる くれといふべき。つれづれ
てより此方、四つの海波の聲聞えず」云々。九重 帝都 面々人々 さしたる くれといふべき。つれづれ
けふも暮れぬと 拾遺集の歌に「山寺の入相の鐘の聲ごとくけふも暮れぬと聞くぞ悲しき」新古今
集に「暮れぬめり幾日をかけて過ぎぬらん入相の鐘のつくづく」として「などあるを
胸におき つくづく」と云「軒の玉水」まで新古今集の歌。ながめは長 獨眺むる 續拾遺集の歌「ま
て綴る。 つくづく」と云「軒の玉水」まで新古今集の歌。ながめは長 獨眺むる 續拾遺集の歌「ま
むる夕ぐれはいかに露けきも とりとく 出し、其取るといふを承けて更に梓弓に續く。梓弓 梓の木にて
のどかはしる」を引けるにや。 とりとく 出し、其取るといふを承けて更に梓弓に續く。梓弓 梓の木にて
名にて、「や」「ひく」 やたけ心 勇みは 頼みある中 互に頼もし 心のそこひなく 云そこひ
などに冠する枕詞。 やたけ心 勇みは 頼みある中 互に頼もし 心のそこひなく 云そこひ
心に奥底なくうちあけたる様を、雨夜の會合の縁にて源氏物語帯木の巻の「心の中に思ふことをも隠しあへず
なん睡れ聞え給ひける、つれづれと降りくらしめてやかなる宵の雨に」云々の文を借りて綴る。源氏物語の

此條は、源氏の君、ある雨の夜、其宿直所なる桐壺に左馬の頭、頭の中將等と集りて女の品定をしたる事を記せる處にて、これを雨夜の物語といふにより、まづ其文を引ききて、さて「これぞ雨夜の物語」といへり。同じく源姓なる頼光を源氏の君に見立て、詞を巧めるにや。 **しなぐ言葉**の 同し物語の同じ條に、其時頭の中將の、女に上中下のきよそへて「詞の花」といひ、咲き、匂、紅など花の縁にて綴れり。 **深き紅** 人々の酒に酔ひて、顔のあかを綴り、面の紅に對し **羅生門** 正しくは羅城門。平安の都の朱雀大路の九條に在りし南方外郭の正門。今は下京には住む人も少く、家居もまばらなりしかば、此門も延暦年中平安奠都の始に成りしものなれど、弘仁七年の暴風に一たび倒れ、後再興したるも程なく荒廢せり。今の京都是後に規模を狹めたるものなり。朱雀大路は後の千本通より遠く南に續き居たるものにして、 **鬼神** 平安朝の中葉以降諸國を横行せし兇賊の類を鬼に羅城門の遺跡は今大内村大字八條の四塚に在り。 **保昌** 藤原致忠の子、頼光、頼信等と共に驍勇を以て聞えし人なり。左馬頭となり、丹後、大和、攝津等の守に歴任し四位に敍せられたり。さるを頼光の家臣に誤りてこゝに加へたるは、お伽草紙本酒頭童子の假托を繼承せるにや。 **條なき事** 條理正しか **土も木も** 天智天皇の時、紀朝雄が叛臣藤原千方及其一味の鬼を鈴鹿山に討べきとあるを少し更へて出せり。此千方の事は太平記に出づ。原 **そこつ** 輕し **羅城門に到りた** 歌は第一句「草も木も」なるを諸語曲皆「土も木も」として引けり。 **陸奥の** 拾遺集の歌に「陸奥の安達が原の黒塚に鬼こ其處に置く。さへ **野心** こゝには異心と **陸奥の** 拾遺集の歌に「陸奥の安達が原の黒塚に鬼こ

の心をためし見るといふ見の音を以て陸奥に續く。安達が原は岩城國安達太良山(古く安達山)の裾野。此歌は別に諸曲安達原の材をなせり。 **物の具** 鎧 **肩に掛け** 鎧を着る慣はし **同じ毛の兜** 鎧の威糸と同色の糸にて綴ち **重代** 先祖より代々 **たけなる馬** 高馬 **舍人** もとは宮中に近侍して雜役を勤むる者の **二條大宮** 二條通と天宮 **南がしら** 乘馬の頭を南に向くる意稱。こゝには馬の口など取る下級家人。 **東寺** 京都下京九條の北、大宮の西にあり。金光明四天王教王護國寺と號し、眞言 **鈴** 兜の鉢の南の果な **東寺** 宗の總本山たり。もと朱雀大路の東西に東寺西寺とてありしもの一なり。 **鈴** 兜の鉢を後に垂れ、頭 **すはや** 突然の出來事に驚き **阜門** 王侯の門の稱又高門の字をも充つ。羅 **さしかざ** を掩ふ部分 **かざすこと** **鐵杖** 地獄の鬼の罪人を苛責するに用ふる鐵の杖 **ひろむ** 力挫 **わきつち** 脇ついちの略。門の脇の築地。 **ち**とあり。ついちには築き土の約 **聞ゆる** 鬼の呼はる聲を承け、音に聞えにて土を築きて高めたる土手。 **聞ゆる** たる鬼の意にて次語に續く。

装束附

シテ (鬼神)
面纒、赤頭、赤地金緞鉢卷、襟紺花色の類、着附段厚板、半切、法被、紋附腰帶、打杖。
前ワキ (渡邊綱)
侍烏帽子、着附厚板、白大口、掛直垂、縫紋腰帶、小刀、男扇。
ワキツレ (保昌、貞光、季武、公時)
同 上。

ワキツレ (源頼光)

黒風折烏帽子、着附厚板、白大口、長絹、腰帶、小刀、扇、金札(懐中)。

後ワキ (綱)

黒頭、鍬形、白鉢巻、着附厚板、白大口又は半切、法被、紋附腰帶、太刀、鞭(持)、金札(右の腰にさす或は後見持出しにても)。

五番目

畧四番目

綱・保昌・貞光・季武・次第上(健カ・執ヨク) 公時

ツヨク (拍子念)

羅生門 二月

ツレ 源頼光 シテ 鬼神(謠ナシ) 平井保昌

確井貞光 ト部季武 坂田公時

流まる花の都とて。流まる花の都とて

風も音せぬ春べか。これ源の頼光

と我が事あり。借も丹州大江山の鬼

神を従へしより此方貞光季武綱公時。

此人ごと日夜朝暮兼會申は。いふから

此程の晴向も見えぬ春雨よとい程よ。

羅生門

酒サケやさいめがやと（大キクシ）存（サシ）いありがたや西海
 の安アヤシ危キナシの掌タナジコロのうちは（サシ）眠（サシ）し。百ハク王クワノの理リ乱（サシ）
 心のうちよ懸（サシ）けたり（細、保昌、上教、健カニ、滞リナク、貞光、孝武、公時、（拍子合）曇クモリあき君
 のは影（サシ）久ヒサ方カタの君（サシ）の影（サシ）久ヒサ方カタの空（サシ）
 そのやけき（サシ）春雨（サシ）の音（サシ）も静（サシ）よ都（サシ）路（サシ）の
 七（サシ）つ（サシ）の道（サシ）も末（サシ）さぐよ（サシ）洲（サシ）の浪（サシ）も音（サシ）せぬ
 九重（サシ）の春（サシ）ぞ久（サシ）き（サシ）九重（サシ）の春（サシ）ぞ久（サシ）き（サシ）

頼光行（健カニハツキリ）

いよ面（サシ）む。かー（サシ）た（サシ）興（サシ）もい（サシ）さ（サシ）わ（サシ）ら（サシ）も（サシ）此（サシ）

小謡

春雨（サシ）の昨（サシ）日（サシ）け（サシ）は（サシ）晴（サシ）向（サシ）も見（サシ）えぬ（サシ）つ（サシ）れ（サシ）つ（サシ）
 れ（サシ）よ（サシ）け（サシ）も（サシ）暮（サシ）れぬ（サシ）と（サシ）告（サシ）げ（サシ）渡（サシ）の（サシ）聲（サシ）も（サシ）
 寂（サシ）き（サシ）入（サシ）あ（サシ）ひ（サシ）の（サシ）鐘（サシ）。上（サシ）教（サシ）。精（サシ）シ（サシ）ノ（サシ）ト（サシ）リ（サシ）ト（サシ）。春（サシ）の
 長（サシ）雨（サシ）の（サシ）寂（サシ）き（サシ）の（サシ）春（サシ）の（サシ）長（サシ）雨（サシ）の（サシ）寂（サシ）き（サシ）の（サシ）
 志（サシ）の（サシ）あ（サシ）よ（サシ）つ（サシ）た（サシ）よ（サシ）。軒（サシ）の（サシ）玉（サシ）水（サシ）音（サシ）も（サシ）こ（サシ）ぐ（サシ）ひ（サシ）
 そ（サシ）う（サシ）あ（サシ）ら（サシ）む（サシ）の（サシ）ま（サシ）ぐ（サシ）れ（サシ）。も（サシ）あ（サシ）ひ（サシ）語（サシ）ら（サシ）よ（サシ）

諸人よ酒をきめて盃をもうぐあ
 れや棒弓やたけぶのらあつさももの
 交り頼ある中の酒宴あま思ふ心
 のそこひなく唯うちまけつれぐと
 降り暮したる宵の雨とれど雨夜の
 物語多志なく詞の花も美き白も
 深き紅も面もめでし人ら隔てぬ中の

●小話

戯れ面白やもらもよぶく居寄り
 て語らん。餘り寂かた夜もてら程よ。
 皆さゆら寄つて語り物語つら入る畏つ
 てる。行まてい程よ皆いかにしきさつら
 頼光(健カニスラリ) 頼光(健カニスラリ)
 保昌(確カニハキクト) 保昌(確カニハキクト)
 の羅生門よ鬼神の位して暮るた人の

いふに無きかたはくはら 細(カシクナク、ドクシリ)りや保昌よ

對野に無きはらむ。いふに君の序ホオ、シヨオ

為あらむ。まゝを賜へと申しけり

げまゝ細が申をぬぐ。いふに君の序為

をぬぐ。まゝをぬぎて。序をぬぐ。とれをカシ上(確カリカウテ)

取りとて賜ひぬぐ。細のまゝを細上敷(實カシト大キク)

賜さうて。細のまゝを賜さうて。ほ打切

●小話

前をまづいで出でけり。まゝ帰り方らん。(順次ニ運ビテ)

人の心を陸奥の安達が原よあらねヤ

ども。こもれる鬼を従へむ。二度またワ。フ。タ。ダ。ビ

く。面を向く事あら。こゝまで上(實カシト大キク)

りや。様ら。いかにあは。或まのやたけホ。ナ。フ。ア。マ

ぶぞ。怒り。かやたけ。ぶぞ。怒り。き。中鼓中入

備も渡鼻の細。唯あつそのの口論よ(拍子合)

あり。鬼神の姿を見んためよ。物の具取
 けて肩よ懸け。同毛の兜の緒を志め。
 重代のたかを佩き。たけある馬よ打
 ち乗つて。念人をもつらむ。唯騎宿所
 を出でて。二條大宮を南がらよ歩ませ
 けり。上秋(明カニ定ナシ) 春雨の音もまはつらむ。更ける
 夜の音もまはつらむ。更ける夜の鐘も

地拍子
 風の音よ

同々の曉よ。東寺の前やうち過ぎて。
 九條おもてようつて出でて。羅生門を
 見渡せば。物凄しく雨落きて。俄よ吹
 きくる風の音よ。駒も進まざ。高きあり
 き。身あるひ。てこそまうたりけれ。
 其時馬や乗りはあり。其時馬や乗り
 はあり。羅生門の石段よあがり。

返シ
 馬や。乗りま

上
 (稍寛タリトヤ)

(健カニサカレ)

太鼓頭

のれを。取り出し。段々よまきて。おき。端
 らし。と。さ。る。よ。後。より。鬼。の。鍛。を。掴。ん。で
 引。き。留。め。け。れ。ば。ま。か。や。鬼。神。と。太。刀。抜。き
 持。つ。て。斬。ら。し。と。ま。る。よ。取。り。た。る。鬼。の
 緒。を。し。き。ま。ち。ぎ。つ。て。お。ほ。え。ぎ。段。より。飛
 び。お。り。た。り。たり。が。く。て。鬼。神。の。怒。を。あ
 して。が。く。て。鬼。神。の。怒。を。あ。して。持。ち。た。る

● 箇中

地拍子
きんたけ

鬼。を。あ。ら。せ。と。投。げ。捨。て。其。た。け。卓。門。の
 軒。よ。ひ。と。く。兩。眼。目。の。如。く。ま。て。綱
 を。睨。ん。で。ま。ま。た。り。け。り。舞。働。綱。中。強。ク。ト。確。カ。リ。キ。カ
 る。太。刀。を。か。ぎ。細。の。駱。が。も。太。刀
 さ。か。が。ぎ。女。知。ら。も。や。地。を。侵。ま。其
 天。四。討。の。首。を。ま。か。ら。け。れ。ば。鐵。杖
 を。握。り。あ。げ。え。ら。や。と。打。つ。や。飛。び。ち。あ。ひ

羅上月

ちやうと斬る斬られて組みつくや拂ふ
 劍の腕打ち落さるればむじと見えし
 わきつぢよのぼつ。虚言をさしてあがり
 けつや。暮金ひゆけども黒雲おほひ時
 節を待たて。又取るべし。と。呼むる聲も。
 かまろうよ。向ゆる鬼神よりも怒ろ
 かり。細い名やこそ。あびよけれ。

鐵輪

解題

夫に捨てられし女、怨の餘貴船の社に丑の時詣をして鬼となり、男と其後妻との命を取らんとしたるも、安部晴明の新禰によりて果さざりし事を作れり。平家物語劍の巻に、嫉妬深きある公卿の女、貴船の社に七日籠りて鬼神とならん願を立て、満願の夜神託を蒙り、望のまゝに鬼となりて、妬しと思ふ女を始め、男女を嫌はず人数多取りたる物語あり。これに生じたる傳説に基き、其本文に據りて作りたる曲なるべし。此曲中に頭に鐵輪を戴き其三脚に松明を附くる事を作れるより、曲名を鐵輪と呼ぶ。古き諸本又は番組に金輪、鼎の字を充てたるもあり。能本作者註文及二百十番諸目録に世阿彌の作とあれども詳ならず。言繼卿記の永祿十年六月同十一年八月の條に鼎とあり。

能之小書

早鼓といふ小書あり。

諸ひ方便概

葵上に似通ひたれども、それよりは位軽く、品位卑しきものと心得べし。

シテ

前後を通じて嫉妬と忿怒とに燃え立ちたる淺ましき女性の心ざまなるべし。次第は抑へて靜に出で、サシよりさらに心に扱ひ其終の「うちに報いを見せ給へ」とを心持確りと止め、下歌を更へて稍輕やかに出し、上歌はあまり調子を上げずして重くならぬやう詠ふ。着セリフはおつとりと何事もなく言ひ、間をとりて狂言との對話を抜き、「これは不思議の」云々の詞を前よりも強めて確りと言ひ、「夢想の如くなるべし」とを稍氣をかけて確かに地に渡す。後は通じて強みと衰みとを含ましむべく「それ花は」云々の出のサシは徒に氣勢好く運ばず確りと出で、感慨無量の趣を表し、「戀の身の」より一聲の調子に更へ、引き立て、すらりと大きく、地との結合は乗つて弛みなく確りと承け渡す。「恨めしや」云々は稍さらりと強めに、「あら恨めしや」と少し心持し、「捨てられて」を再び乗り、「つまをかこち」「又は恨めしく」は共に痛恨の情を籠む。「いで〜命を取らん」はかゝつて滯らぬやうに扱ひ、「ことさら恨めしき」は調子を内へ取つて確りと詠ふ。

音をこそなかも世をば恨みじを胸におきて出す。同じ世の前世又は後生にあらざる現在の世の中。常に果報は前世より後世に互るも

り。貴船川 貴船山の北部に發し、貴船神社の下を過ぎて鞍馬川に灌ぐ川。頼道を通ひ馴れたる云。以下

疲れたる心を籠めて貴船に到る道を絞す。通ひ馴れたる道の末とは表に、人を呪ふ爲行き通ひ馴れたる貴船の道

道を通ひ、裏に馴れて久しくなりし夫婦の道の覺めはてたる末の意を含む。貴船の道につきては梁塵抄抄に「いづれか貴船へ參る道、賀茂川みものと御度呂池、御度呂坂は、糺

たいたしの坂や、一二の橋、山河さら／＼岩枕」ともあり。糺 直路(たゞち)に通はせて出し、糺の河原とい

の出合ふ下賀茂村の地の名。鞍馬、御泥池 御菩薩池とも書き、みごろ池とも云ふ。上賀茂村の東、京都より貴船に通ずる街道の起點なり。

韻を重ねて次句を起す。うき身 憂き事多き身、前に沈むといへるに、消えん程 身の消え失せん程

に。市原野 今愛宕郡靜市野村に屬す。岩倉 鞍馬川の源をなす川。夜の暗きを承く。橋を

過ぐればといへるは前に引ける。梁 染料に用ふ。鐵輪 五徳の古語。鐵製にて輪形に三脚を立てたる

塵抄抄の「一二の橋」なるべし。丹 赤き土。鐵輪 具。土瓶鐵瓶等を火に懸くる時用ふるもの。氣

色 緑の髪 艶々しく美しき黒髪。空さまに 美しかりし黒髪の逆様に立ちた。鳴る神 雷。風と

ひかけたり。以下、古今集の歌「天の原ふみ轟かしたる神も思ふ中をばさくるものは」を引きて綴る。原歌は

雷神の威を以てしても相思ふ中は引き離さるゝものに非ずとなり。それを句の半より轉じて「さけられし恨の

鬼」と云。憂き人 我につ。下京 昔、京都の四條より。清明 安部清明、一條天皇三條天皇の頃天文博士た

語劍の巻の此鬼神の條に渡邊綱が一條戻稿にて此鬼神を斬りし時、安部清明の占ひて七日 語らひ 契る調

の忌をなすべしと云へる事を記せり。それに思ひよりてこゝに清明を出せるなるべし。

法 調伏の祈念 念じ祈ること。轉じかへ 受けんとする災厄を轉じて免れしむること。茅の人形を人尺に作り 人形の

人間の寸尺に合せて作ることを。名字を内にこめ 名を書きて人形の中に入れて。肝膽を碎き 誠心を

下祈りの天開け地固まつし 天地開關の初伊弉諾(男神)伊弉册(女神)の二神、夫婦の語らひをなし

詞なり。の磐座は古事記に見えたる辭にて天上の神の御座。みとのまきは、魍魎 妖怪の一種。山川木石などの精靈。こ

ひは男女肉交の古語。陰陽の道とは猶夫婦の道といふが如し。魍魎 妖怪の一種。山川木石などの精靈。こ

といふ程の意に用ふ。法華經譬喻品に「處々皆有魍魎魍魎夜叉惡鬼」。非業の命 前世の業因によらざる非道の災

神と地。諸佛菩薩 諸の佛と、諸の菩薩と。明王部 諸の惡魔を降伏する不。天童部 諸天と諸童子とを合せて一

童子の如く諸佛の童形。九曜 九曜星の略。日月木火土金の七曜星に計都、羅喉の二星を加へたる稱。古

七星 北斗星即ち貪狼、巨文、祿存、文。二十八宿 周天の星の群にそれ／＼名を附したるもの、總體。宿は

に分た。斜脚の暖風 和漢朗詠集の微雨自東來と題せる詩句に「斜脚暖風先扇 無常 生滅轉變して

果は車輪の廻るが如く 涅槃經に「三世因果、循環不失」などあるより云ふ。因果とは總ての事は因

に展轉して止まる時。戀の身の浮む事なき 戀の妄念の爲に身の浮ぶことなきを、よく水を潛る鴨

ん爲鴨川に續け、「浮ぶことなき」を承け、又戀の思に沈む意を兼ねて「沈みしは水の」といひ、鴨の羽の青きと

は火の如くに赤く(中略)われは(中略)人の爲にうらみをのこして今はかゝる鬼の身となりて候云々。源平盛衰記に「吾は是宋朝の作文の博士、好色の遊客也。(中略)色に耽りては詩を作り、女を戀ひては歌をなせり。彼の好念積りてかく青き鬼となり侍り」。又別に「文徳天皇の染殿の後は清和帝の御母儀、太政大臣忠仁公の御女也。柿木紀僧正御修法のついでに思を懸け奉り、紺青鬼と變じて御身に近づきたりけん、同じ道と云ひながら恐しくぞおぼゆる」などありて、好色の妄念によりて青鬼となりたる例少からず。それこれ思ひ合せ、世に好色のあまり鬼となりしは青き鬼にしてわれは亦赤き鬼なりといへるなり。一沈みしは水の「まで青き鬼を云はん爲の序詞と見

われは貴船の

後拾遺集の和泉式部の歌の詞書に、「男に忘られて侍りける頃貴ぶねにまゐりてみたらし川に螢の飛び侍りけるを見て詠める」、歌に「物思へば澤

の螢も我身よりあくがれ出づる玉かぞ見る」とあるを引き、前の鴨、鴨川に對して、こゝには螢、貴船川を出し、螢火と云ひし火の縁にて己の頭に戴く鐵輪の足の火を呼び起し、焰の赤きを承けて赤き鬼に續く。赤き鬼は前の青き鬼に對せしめたるなり。原書平家物語にも「顔には朱をさし、身には丹を塗り」と見えれば、作者は此鬼を赤鬼として作り、初にも神託を傳ふる狂言の詞に「身には赤き衣を着、顔には丹を塗り」といへるなり。

殿御

婦人より男子を敬ひ呼ぶ語

玉椿の八千代

椿と松とを久しきもの、例に引きて、いつまでも變らじと思ひし心を述ぶ。春日の神樂歌に「松は祝のためしに引かるゝは、春日の山の姫小松、玉椿の八千代」などあるを心に置きて綴れるにや。玉椿の玉字は美稱。二葉の松とは小松の意なり。椿に八千代といふことは、もと莊子に「上古有大椿樹、以八千歳爲春、八千歳爲秋」とあるに出でたるな

るな。かこち、思ひ。因果は今ぞ、雪に云ひかけ、其縁にて消えん命といひ次ぐ。惡しかれと云。詞花集の歌。原歌下の句は「生ふなるものを人の歎きは」。善かれと思ふ中にさへ歎くべき事の起り易きにと云ひて惡かれと思ふつれなき人を恨める歌なり。惡しかれを蘆刈れに、歎きの「き」を木に通はせ、それらの縁にて山、峰、生ふの語を用ひ、辭句を綾なし

云へるなり。山の峰とは唯詞を重ね言へるに過ぎず。執心、深く執着する心。いてぐ、自ら心を促しいふ詞しもと、罪人を打つ杖。地獄の鬼の鐵杖を、うはなり、妻からまいて、絡め卷、うつの山、打つ

以て罪人を打つに擬していふ。うはなり、妻からまいて、絡め卷、うつの山、打つ

津と韻を重ねて文の綾とし、伊勢物語の歌「駿河なる宇津の山邊の現にも夢にも人に逢はぬなりけり」に辭を借り、夢現と再び「うつ」の韻を重ねて云ひ次ぐ。うつは夢に對して現實をいふ詞。以下、夢とも、將現實とも思ひ分ち難き憂き世の中に、因果は目、今さらさこそ、今となりてさぞ悔し、あだし男、浮氣男といふあたり廻り來りたるなりとなり。今さらさこそ、今となりてさぞ悔し、あだし男、浮氣男といふ程の意。

三十番神

伊勢、熱田、八幡、松尾等日本中の名高き神社三十體を月の三十日に配し法華守護

こゝには命を取らんとまで思ひつめたる夫の意。つまは配偶の男女を問、あまさへ、その上。あ、神通、變はず、一方より一方を呼びし稱。女をのみつまといふは後世のことなり。あまさへ、まつさへ。神通、變自在なる力。通力といふも同じ意なり。たよく、なよな、足弱車、車輪の堅固ならずして進みの鈍き車。力の弱りたるさだかに、目に見えぬ鬼、古今集の序に「目に見えぬ鬼神をも」云々であるに辭を借り鬼の姿の消え失せ行く様をいふ。

装束附

前シテ (女)

面深井又は泥眼、長鬘、又は常のにも、無色鬘帶、襟淺黄、着附摺箔、無色腰卷、唐織壺折、無色縫入腰帶、女笠、鬘扇。

後シテ (女の生靈)

面橋姫、鐵輪戴く、鬘はねもとゆひ結ひつく、襟赤又は淺黄、着附赤地無紋箔、縫箔腰卷、縫入腰帶、紺地打杖、修羅扇。

ワキ (安部晴明)

風折烏帽子、着附厚板、白大口、縷狩衣、腰帶、扇、幣。

ワキツレ (男) 着附無地鬘斗目、素袍上下、小刀、扇。

四番目

鐵輪

九月

ワキツレ 女 (後、鬼女)

ワキツレ 安部晴明

男

狂言 貴船社人

^{狂言}
 貴船の者。貴船の宮よ仕入申す者
 こそ。借も今夜不思議ある靈夢を蒙
 りて。其謂は都より女の丑刻詣をせら
 れる。申すや行せらる。子細あらたよ
 霊夢の程よ。今夜来られ
 る。霊夢の想のや申すやと存る

シテ次第上(物静ニ稍強ミ)

ヨウク
(拍子合)

目も敷そひて窓衣目も敷そひて窓
 ごろも貴船の宮よ来らし(拍子合)げよや
 のいよあれたる駒の敷束ぐも二道か
 くるあだ人や頼まゝとこそ思ひりよ
 人の偽ま知らで契りそありかや
 さも唯われからの心あり餘り思よも
 苦い心よ貴船の宮よ詣でつゝ信む

●小謡

かひもあま同いせのうらよ報や見せ
 絵と頼や懸けて貴船川早く
 歩や運ぎん上歌通ひ駢れたる道の末
 通ひ駢れたる道の末よも紅のあそ
 らぬと思よ沈むは泥池生けるあひあ
 き夏を身の清らん程もや草深き
 市原野邊の露分けて月夜二

鞍馬川橋を過ぐれば程もなほ貴船の
宮の著たるはつて貴船の浦の著たる
はつて。程の程も程の程の著たる
はつて。静の静の静の静の著たる

狂言

申す申す申す申す申す申す申す申す
丑刻詣ぬれば程も程の程の著たる
馬身の下を程の程の程の著たる

申す申す申す申す申す申す申す申す
たかしの馬願ふ程の程の著たる
蹄のあつて身も赤き女も著たる
丹をぬつ顔も鐵轡を戴かぬ程の
口も舌も舌も舌も舌も舌も舌も
忽ち鬼神も舌も舌も舌も舌も舌も
舌も舌も舌も舌も舌も舌も舌も舌も

らね。恨の鬼もあつて入ると思ひ知ら
せん。憂も入ると思ひ知らせん。中入

返シ
あらせん
ミ
果ッ(サラリ)

あやうなる者。下京邊の者もあやう
なる。あつて此向うも續ち夢を見
る程。清明の夜もくみちを裁へ。夢
あやうなる者申せ。あやうなる者
案内申す。誰も思ひ知らせん。中入

ワキ(落著テ確カリ)

ワキ(サニ)

下京邊の者もあやう。此程も續ち

夢を見悪くする程。夢もあやうなる

者もあやうなる。あつて思ひ知らせん

者もあやうなる。あつて思ひ知らせん

者もあやうなる。あつて思ひ知らせん

者もあやうなる。あつて思ひ知らせん

者もあやうなる。あつて思ひ知らせん

おたのしみ

くわもいしお妻や離別リビツ。新アキラく妻や
 おたのびしてらも。さやの幸よて
 もさるこワキ（健カニスラリ）
 彼のもの佛神よ新の數積つて。今
 も今夜よ極まつてい程よ。某が調法
 よい調カナり難ガくワキツレ（サラリ）
 よあつてい事いふ幸よ。平ヘイよ然シつ

早（落著テ確カリニ）くわもいしお妻や離別リビツ。新アキラく妻や
 おたのびしてらも。さやの幸よて

てまらおたのしみもいし。まらして供物モツトを
 序調ツレくワキツレ（スラリ）
 轉マりあつて。夢ユメの形カタを人ヒトよ
 作り。夫婦フウフの名ナ字ジをうらちよ龍リウめ。三重ミヘ
 の高タカ相サマ五色ゴシキの幣ヘイ。おのく供物モツトを調ツレ

へて。肝膽を碎き祈りけり。謹上再拜。
(中強クサラリ) 祈りけり。謹上再拜。
 その天開け地固まりよりこの方伊
 弉諾伊弉册の尊。天の般居座りて。
 みとのまぐさひあり。男子夫婦
 の語りやあり。陰陽の道永く傳はる。
 そのよあんど。魁魁鬼神。妨げやあり。
 非業の命を取らん。地(拍子合) 犬小の

●雜子切迄

神祇諸佛菩薩。明王部。天童部。九曜
 七星。二十(モ)八宿。や。驚か。奉り。祈れ。ハ
 不思議や。雨降り。風。落。ち。神。鳴。り。稲。妻
 去き。り。よ。満。ち。く。法。幣。も。ぎ。め。き。鳥
 動して。身(シツメル)の毛。よ。だ。ち。て。怒。り。や
(凄味アリテ底強ク) 引。れ。花。の。斜。脚。の。暖。風。は。開。け。て。同。ト
(拍子不合) 暮。春。の。風。は。散。り。日。の。東。山。よ。り。出

後シテ上

出端
(拍子不合)

早く西嶺（ト）は隠れぬ世（ト）の無常
 かくの如（ト）。因果（ト）の車輪（ト）の廻（ト）るが如く。
 われは憂（ト）あり人（ト）ごよ。忽（ト）ち報（ト）を見
（引ミテ）まぐわあり（ト）。愛（ト）の身（ト）の浮（ト）む事（ト）あり
（多カズ確カリ）賀茂川（ト）は沈（ト）み水（ト）の青（ト）き鬼（ト）
（拍子合ハル）われ（ト）貴（ト）船（ト）の川（ト）瀬（ト）の燈（ト）火（ト）戴（ト）
（濃味ニ地ニナク）く鐵輪（ト）のさ（ト）の（ト）炎（ト）の赤（ト）き（ト）鬼（ト）も（ト）あ（ト）

（カフテ地ニナク）地（ト）外（ト）たる男（ト）の枕（ト）は寄（ト）りそ（ト）ひ。
（拍子合ハル）い（ト）は殿（ト）御（ト）は珍（ト）ら（ト）や（ト）恨（ト）め（ト）や（ト）
（拍子合ハル）身（ト）と契（ト）り（ト）其（ト）時（ト）は玉（ト）椿（ト）の八（ト）千（ト）代（ト）。
（ト）二（ト）葉（ト）の松（ト）の末（ト）わ（ト）けて（ト）愛（ト）ら（ト）と（ト）思（ト）
（ト）ひ（ト）は（ト）な（ト）ど（ト）も（ト）捨（ト）て（ト）果（ト）て（ト）給（ト）らん。
（ト）あ（ト）ら（ト）恨（ト）め（ト）や（ト）捨（ト）て（ト）ら（ト）れ（ト）て（ト）捨（ト）て（ト）ら（ト）
（ト）れて（ト）思（ト）ひ（ト）思（ト）ひ（ト）の（ト）後（ト）は（ト）沈（ト）み（ト）人（ト）を（ト）恨（ト）み（ト）

シ中(靜ニ)

夫やあさち

地(カウツテ)

ある時の恋

シ中(ハ)

地上(順次ニ位進ミテ)

恨めしく

起すも寝ても忘れぬ

思の因果ハ今ぞと。白雪の消えん

(氣ヲカヘ調子ヨク引ユテ)

●獨吟仕舞

命ハ今宵ぞ

(シツメル)(拍子外ニ)

たさ

上秋

悪

わと思はぬ山の峯よだも思はぬ

の峯よだよ人のあざむきはよあるよ

しや年月思は沈む恨の數積つ

て執心の鬼とあるも理や

命を取らん

と志もあを振り上げらるるの髪

を手にあらましておつやらの山の

夢の現もも。分あはらさむ世よ因果ハ

めぐりあひたり今ならんそ

あつらあそて微心りや思ひ知れ

因果

藍染川

解題 都に置かれたる妻、子を具して夫の任地筑紫太宰府に尋ね下りしが、筑紫なる假の妻に欺かれて夫の心變りたるものと思ひ謬り、文を遺して藍染川に身を投ず、夫やがて此事を知り、神に祈りてこれを蘇生せしむ。謡曲に世話物の流行せし餘波として、古曲不逢森(阿波天の森とも書く。別名友魂香。今は廢曲となれり)に倣ひ、巷説に基きて作りたる曲なるべし。作の時代の新しき事行文の趣によりて推定せらる。能本作者註文に作者不明とあり。或は愛染川の字を充て、又別名を染川といふ。

謡ひ方便概

波瀾曲折多き曲なれば、文意を十分に會得して謡ふ事肝要なり。

シテ

前は聲調の餘り若々しからぬやうに心附けあるべし。次第は聊か下目に取りて確りと扱ひ、派手になるを好まず。サシよりさらりめに取り、下歌を稍靜に、上歌は道行なれば少し引き立つる心なるべし。

「ワキツレとの問答は優しきのみならず、確りとしたる味をも含むが宜し。「あれ嬉し」と云々はすらすらと應へ、「御下り」以下文の文言なれば一息おきて別に出で、思切なるが如くに讀み、氣を更へて「あらつれなや」云々を讀ふ。これより身をはかなみ悲しむ心ばえなるべし。「御身を父に」云々のクドキはしつとりと扱ひ、次の子との問答も沈みたる調子を帯び、「うたてやな」云々を稍確りと、以下掛合事も浮きやかにならぬやう承け渡し、突き詰めたる心持をあらはすべし。後は天神なれば位有りて勢よくどつしりと扱ふ。

子方

大方子役に變らざれど、「のう母上」以下さらりとしたる中にも聊か心あるべし。

ワキ

後シテの出づるまでは舞臺の中心となるものなれば、ワキとしては位を持ちて確りと大きく扱ふべし。「これは梅千世が方へ」云々は文を讀む心なるべく、讀み行きて「や」と氣着きて驚きたる態に言ひ、以下心して少しく下を取る。「いかに申候」云々は死體に向ひて言ふ處なれば、別の趣にてしつとりと扱ひ、「いへどもく」を心持して地に渡す。クセの上端は確に謡ひ、「神主御幣おつ取つて」云々は大きく確りと出で、「謹上再拜」以下の祝詞を改めて嚴に扱ふ。

場

以下羅漢講式中の總禮偈の第二句第三句を改作して神主の祝詞の辭に更ふ。原文第二句は「十六大聖影

用ひて佛寺を汎稱する詞。帝珠は帝釋の網珠、因陀羅をいふ。帝釋天の宮殿に飾れる珠玉の網にして網珠玲瓏

として一珠に諸珠の影を現し珠々交映すと云ふ。今此道場は帝釋の網珠の如く十方世界の佛法僧の三寶此中に

影現したまふ、我此三寶の前に頭面接足の敬禮をなすとの意。頭面接足は南無梵語。佛に救ひ天満天

神 即ち其所を廟所とし、尋で延喜五年八月味酒安行神託によりて始めて神殿を建て天満大自在天神と稱せり

へり。舊里を去つて 昔公は本佛身なりしが其佛世界を 幕下 近衛大將の異名。昔公の右近 西海

の西都 太宰府を指す。安樂寺 太宰府にありし寺。本地覺王如來 本地とは佛の垂跡化身以前の本地の謂。即

なる常寂光土を出で、此太宰府に住み給ひたりとなり。覺王といふも如來といふも共に茲には佛の意。唯頼

め 云 新古今集に出でたる清水觀音の歌。原歌には初句「猶頼め」とあり。さしも草は蓬の別名。此歌は 昨

日は北闕に 云 一條院より正一位太政大臣の官位を菅原道真に贈らせ給ふ敕使安樂寺に下り、其詔書を讀

死歎其我奈、今須望足護。法性の都をいで 法性真如の寂光の都より垂跡化現しての意。分段同居の 分段は分

皇基(太平記其他)を引く。身の意、六道に輪廻する衆生は其業力によりて分々段々の果報を受け、長短大小壽夭の別あるを云ふ。同居は

凡聖同居土の略にて凡夫も聖者も同居するをいふ詞。即ち娑婆世界は業力により分々段々の果報を受けたる衆

生の一切同居せる塵界なるに、神は猶徳光を和けて其塵に交はり給ふとなり、平家物

語に「法性真如の都より出で、分段同居の塵に交り、愚痴の衆生に縁を結び給ふ」。冥々ある苦海

冥々はくらき貌。苦海は生死の間に迷ふ苦の涯りなきを海。菩提涅槃 佛。宿因 云 前世よりの因縁。内

に喩へたる語。こゝには京の女の入水せるに通はせていふ。菩提涅槃 佛。宿因 云 前世よりの因縁。内

女の身内に存し通じての意。受け難き 本来は人世を受くる事に云ひ慣せる詞なれど、こゝには蘇生の事。知識 云 天

天神の知の外部よ 春に又逢ふ 女の蘇生

り助けたる意。

装束附

前シテ (女) 面深井、鬘、鬘帶、襟淺黄、着附摺箔、唐織着流、扇。

後シテ (天満天神) 面天神三日月崇神、黒垂又黒頭にも、初冠、襟白、着附厚板、半切、袷狩衣、縫紋腰帶、幣。

子方 (梅千代) 着附箔、稚兒袴、扇。

ワキ (宰府神主) 着附厚板、白大口、長絹又は狩衣、腰帶、扇、幣。

ワキツレ (左近の尉) 着附熨斗目、素袍上下、小刀、扇。

トモ (従者二人) 同上。

四番目
畧勝能

アキツメガワ
藍染川

無季

子方梅十世 様シテ 天満天神
前シテ 女 太宰府神主 狂言 神主妻
ワシキ 左 近 者
トモセ

シテ 次男上 (優ニスラリ)

ヨウク (拍子巻)

ゴト

シテ 次男上 (優ニスラリ)

シテ 次男上 (優ニスラリ)

シテ 次男上 (優ニスラリ)

忘れの草の名はありと。忘れの草の名
ありと。忍ぶ人の面かげと。これ
一條今出川は信む女もてい。げよ。徳
ある契もて。心やさ入。筑紫人の袖
あるその。真交中の。疎くありぬる
身のは。い。か。も。あ。ら。あ。れ。

此子が為よ父を尋ねて（寛タリト） 駢れも駢
 れぬよ遠旅の心（拍子） 子も迷ふらん（シヤ）
 筑紫とん西とんあり聞き（打切） 西
 ぞもごあり聞き（打切） 月の入るを
 志るべもて行くへも知らぬ旅衣野山
 幾重か重ぬらん思や昔の根の
 長門の閑路程もなく香椎博多を

上歌

打ち過して宰府はやく著きよ
 けり宰府は早くしかなら（静ミスラリ） あり
 嬉しや喜むる程の宰府をやらしよ
 著きよまづ此處をて宿を借ら（歌フカ） せ
 むさよして此方へ来つらん（ウ） 此家
 の内へ案内申ふ誰（サヤリ） を渡りいぞ
 都方の者よ（優ニスラリ） 一夜の宿や序

地上歌

小謡 (拍子合)

れも力な。今から何と歎くか

筑此京人。虚言も聞かしてよ。虚言

きも聞かしてよ。頼みかけのさあ

あはあああ。あはああ。あはあ

らま。ののの。ひたきらよ。草むら

き道への女の頼も本蔵かく。今

あか身もあか。思ひもして。うら

り子も残。置くくも悲。かよ残

置くくも悲。かよ。かよ申の。序

痛。く。く。く。神。殿。あり。此。處

よ。置。か。申。も。あ。の。ま。事。も。の。間。急

ら。い。の。家。も。あ。い。り。か。く。も。時。まで

あ。ら。う。き。の。ま。の。あ。い。の。梅。千。世

何。事。も。の。ま。の。あ。い。の。都。よ。よ。ら

あいらうきのみまのあ
子方(サラリ)

シテ(静ミ)

シテ(沈ミテ確カリ)

事お目ねおあはれおしくにおはるの廣
 室のまぢり越え様遠くおあのお思ひあり。
 おつかひしてよ待ち終く終く
 母のまぢりこれらおあへる程も離れ
 申おあはれおあへるにたなまおあへる
 愛の終りおあへるの程も離れおあへる
 おつかひおあへるおあへる待ち終く終く

母の行も真のお思ひおあへるにたなまおあへる
 り終く終く母の今も思ひおあへる
 まぢらぬ思の色もおあへるおあへる袖
 の別もおあへるおあへる親心の
 思ひおあへるよ母の身のお思ひおあへるよ
 母の身のまぢりおあへるおあへる今
 真の身のおあへるおあへるおあへる

子方(サナリ)

(ニマサハルハル)

子方(サナリ)

(カネ)

池上歌

(梅子合)

(シワナリト和)

待ち給へイハシとイハシ顔イハシの空目イハシして藍染川
 身イハシを投イハシぐるイハシ藍染川イハシの身イハシを投イハシぐる
果て何と申イハシまイハシごイハシ。藍染川イハシの身イハシを投イハシげ
 たイハシの申イハシまイハシごイハシ。あイハシる者イハシぞイハシ越イハシ
 え見イハシがイハシやイハシとイハシ存イハシるイハシやイハシ。言語道断イハシのイハシある
 者イハシぞイハシとイハシ存イハシごイハシとイハシらイハシふイハシ。某イハシがイハシ處イハシはイハシ泊イハシりイハシたる
 女イハシはイハシもイハシとイハシらイハシふイハシのイハシ梅イハシ千イハシ世イハシ殿イハシ母イハシ御イハシ

の身イハシを投イハシげ給イハシひイハシてイハシらイハシごイハシ。急イハシとイハシてイハシはイハシ隨イハシ見イハシ
子方のイハシ母イハシ上イハシ恨イハシめイハシのイハシ所イハシありイハシさまイハシ
 やイハシ。母イハシ御イハシのイハシかイハシとイハシまイハシまイハシまイハシごイハシとイハシてイハシ。頼イハシ
 もイハシとイハシ思イハシひイハシまイハシつイハシくイハシらイハシるイハシのイハシ夢イハシのイハシやイハシ
 あイハシさまイハシのイハシやイハシ。悲イハシ心イハシやイハシ。あイハシらイハシぬイハシ花イハシ
 紫イハシのイハシ果イハシよイハシ来イハシてイハシ。父イハシ母イハシさイハシらイハシふイハシのイハシ捨イハシ子イハシとイハシあイハシるイハシ。
 みイハシづイハシかイハシらイハシるイハシ誰イハシやイハシ頼イハシまイハシさイハシまイハシ。末イハシのイハシ露イハシ

と存^(氣ヲ更ヘテ)じしよ難^{トモ(サマリ)}々ある 其^(サマリ)の所

早^(健カニカウテ)

あの藍深^シニよ入^ルの多く集^ルまりて

ある。網^ヲやぎ^ルりくか殺^ス生^ル林^ノ断^ルの處

もあ^ルよ。意^ヲり^テ留^ルあ^ガて^申し

くわ^ク畏^(サレニ)て^申す。あ^ク神^ノ宮^殿

の^邊に^ある^網や^ぎり^くか。

殺^ス生^ル林^ノ断^ルの^邊に^ある^網や^ぎり^くか。

あ^ガて^申す。あ^ク神^ノ宮^殿

の^邊に^ある^網や^ぎり^くか。

あ^ガて^申す。あ^ク神^ノ宮^殿

の^邊に^ある^網や^ぎり^くか。

あ^ガて^申す。あ^ク神^ノ宮^殿

の^邊に^ある^網や^ぎり^くか。

あ^ガて^申す。あ^ク神^ノ宮^殿

意^ヲり^テ留^ルあ^ガて^申す。

トモ(サマリ)

ふじくまのし

【半】(健カニ) 子方(サラリ) 母(サカシ)の身

を投げたもの申さるに、【半】(サラリ) 母をある者ぞ

かこぶ都より女世の入を尋ねて下

りらぢ。【半】(大キク) 恨み身を投げたる由

申す。【半】(大キク) 言語道断。都より還らばり

たるよ。【半】(大キク) 恨み身を投げたる由

あるよ。【半】(大キク) 恨み身を投げたる由

者もであるぞ。【半】(大キク) 恨み身を投げたる由

【半】(大キク) 恨み身を投げたる由

【半】(大キク) 恨み身を投げたる由

【半】(大キク) 恨み身を投げたる由

【半】(大キク) 恨み身を投げたる由

【半】(大キク) 恨み身を投げたる由

【半】(大キク) 恨み身を投げたる由

口^コキ^キツ^ツリ^リ（サ^サラ^ラリ）

心^{ココロ}の^ハ志^シは^ハ賢^{サトウ}人^ト一^ニを^シと^シ返^ス一^ニ申^スね^ドも
 か^カら^ニか^ニら^ニも^トた^ク賜^ハら^レら^クは^シ又^モ取^ル
 こ^コの^ハ書^キの^ハし^ト也^ニ 早^{ハヤ}（落^{オチ}著^{ショ}テ^テ滞^チリ^リナク） 梅^{ウメ}干^{カン}や^ヤが^ガく
 書^{カキ}の^ハ冊^{ソク}か^ニと^シ書^キの^ハ身^ミを^シも^トか^ニか^ニ捨^スて
 書^{カキ}の^ハか^ニあ^レべ^シは^シが^ガ書^キの^ハあ^レも^ト一^ニは^シも
 情^{ナカケ}知^チら^レも^トか^ニも^トわ^カら^レぬ^レ親^ナの^ハく^レれ^ドも
 一^ニは^シあ^レら^レむ^レは^シ扶^ツ持^チ一^ニ給^フ

草^{クサ}の^ハ蔭^{カゲ}も^トし^テ神^{カミ}の^ハあ^レも^トく^レか
 あり^{アリ}。大^{オホ}内^{ウチ}も^トあり^{アリ}一^ニ時^{トキ}は^ハ梅^{ウメ}壺^{ウツ}の^ハ侍^{サマ}従^ジ。
 一^ニ條^{ジョウ}今^{イマ}出^デ二^ニの^ハ書^{カキ}留^ルま^ス。當^{トキ}所^ノの^ハ書^{カキ}名^ナの^ハ
 知^チら^レぬ^レも^トも^ト昔^{コト}在^ア京^{キョウ}の^ハ書^{カキ}時^{トキ}ハ^ハ中^{ナカ}務^ム頼^{レン}
 登^{トビ}言^{コト}幸^{サイ}府^フの^ハ神^{カミ}也^ニ。言^{コト}語^ゴ道^{ダウ}断^{タン}の^ハ次^ジ弟^{テイ}
 一^ニは^シも^トの^ハあ^レも^ト今^{イマ}も^トあ^レも^トの^ハ事^{コト}也^ニ
 一^ニは^シな^レし^テも^トあ^レも^トの^ハ思^{オモ}議^ギあ^レも^ト事^{コト}

藍波川

十一

おろしく
トモ

こころをなむ。あの娘を者やいふあたし
(頼ヲ志メテ)
 連れて来て来たうへに
ロギン
 母をいふ。いふも申す。
 神宮殿の物行やうへに
早
 侍らせ。あたし
(海軍ニ侍ル)
 不便の
 者や。かゝ道のいふも
子方(スラリ)
 情も
ナサケ
 つかへ。あたし
静ニカクテ
 だび給へ。あたし
(静ニカクテ)
 里あり。

●小話

あり。あたし
(確カ)
 早
地上
 影よ。あたし
(指子合)
 見えぬ。あたし
子方(セリ)
 目も
 梅干や。顔も姿も
かん又
 駢れ。母よ。あたし
シツメテ
 たが
 ため面影のこと
前ヨリニ
 母よ。あたし
ナサケ
 使も。あたし
ナサケ
 の力や。あたし
ナサケ
 けの
ナサケ
 取りつき髪
シツメ
 撫で。あたし
シツメ
 思ふ。あたし
シツメ
 気色
シツメ
 の尉。あたし
シツメ
 餘り。

おの者不便ビヱンの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。
思シひヒにニシシムムトト 密ヒソカニにニシシムムトト

早ハヤ (華ニ確カリ)

おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。
おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。

おの事コトは。

おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。
おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。

おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。
おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。

早ハヤ (嚴カニシラトロー)

おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。
おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。

おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。
おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。

おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。
おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。

おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。
おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。

おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。
おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。

● 獨吟

地チククセセ中ナカ (静シヅカニにニシシムムトト)
おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。おの事コトは。

平生の顔色の草葉の色よこた
 らま^中芳態あらたな眠りて眼蓋^目を開
 く事あり。嬋^中娟の黒髪^髪は^髪おれて草
 根^根よま^根い^根せり。婉^婉轉^轉たる^婉魚^魚は^魚消え失
 せて^星面影^影のごき身^身の果^果ぞ悲^悲き
 紅^紅顔^顔空^空よ消^消えて^地華^華麗^麗を^地失^地へり。
 飛揚^{飛揚}の魂^魂づ^魂く^魂よ^魂お^魂ひ^魂り^魂趨^趨く^趨あ

りさ^りま^りあ^りさ^りれ^りむ^りべ^りー^り累^累たる^累古^古墳^墳の
 ほ^ほり^ほ顔^顔色^色終^終よ^終消^消え^消失^失せて^ち郊^郊原^原よ
 ち^ち果^果て^ち思^思や^思跡^跡よ^跡残^残らん^{らん}。
 左^左の^の尉^尉の^の者^者の^の心^心中^中餘^餘り^りよ^よ不^不便^便
 よある^よ向^向臨^臨時^時の^の鞆^鞆帛^帛を^を捧^捧け^け肝^肝膽^膽
 を^を碎^碎れ^れず^ずの^の者^者の^の命^命を^を二^二度^度又^又蘇^蘇せ^せし^しを
 ち^ち思^思ひ^ひに^にく^くる^るよ

尤^{スレ}ま^カの^カ （健カニ） 祈^{イノ}り^ヒを^シ 祝^{イハ}詞^ヒを^シ 奉^{タテマ}ら^セせ^シ
 む^スる^コの^トの^ト （確ニ大キク） 然^{シカ}ら^ズの^ト （拍子不合） 神^{カミ}を^シ
 告^{ツケ}幣^ヒあ^つ取^つて^シ 神^{カミ}前^{マエ}に^シ 奉^{タテマ}り^シ 跪^{ヒザマツ}き^シ 既^{スデ}
 よ^シ 祝^{イハ}詞^ヒを^シ 申^{マツ}し^ケり^シ （最ウ確カリ） 謹^{ツツシ}上^ニ 再^{タビ} 拜^{イハ} 我^ガ 此^{コノ}
 道^{ミチ} 場^バ 如^ニ 帝^{ミカド} 珠^{ジュ} 十^{ジュウ} 方^{ホウ} 之^ノ 寶^{ホウ} 景^{ケイ} 現^{ゲン} 中^ニ 我^ガ
 身^ミ 敬^{ケイ} 禮^{レイ} 三^{サン} 寶^{ホウ} 前^{マエ} 頭^{カブ} 面^{メン} 接^{ツク} 是^レ 帝^{ミカド} 命^{ノチ} 禮^{レイ}
 南^{ミナミ} 無^ク 天^{アメ} 滿^{ミツ} 天^{アメ} 神^{カミ} 廣^{ヒロク} く 奮^{キク} 里^リ を 去^ク つて^シ

遍^{ヒロク} く 幕^{カキ} 下^ノ を 兼^{カシ} ね たり 眼^メ 才^{サイ} 衆^{シュウ} よ 越^コ え^シ
 眼^メ 智^チ 世^セ よ 勝^{カチ} れ 西^{セイ} 海^{カイ} の 西^{セイ} 都^ト よ 安^{ヤス} 樂^{ラク} 寺^ジ
 の 地^チ を 點^{テン} じ して 春^{ハル} 秋^{アキ} を 招^{マツ} く （前テ承ケテ確カニサレリ） や 亦^モ 地^チ
 覺^{カク} え 王^{オウ} 如^ニ 來^キ 寂^{シヤク} 光^{クワウ} の 都^ト を 出^デ て （位有リテドフシリ） この
 大^{オホ} 宰^{サイ} 府^フ よ 任^ニ み た ま へ （後ニテ上） 唯^{タビ} 頼^{タノ} め （出端）
 標^{ヒシ} 茅^チ が 原^{ハラ} の さ^サ も 草^{クサ} わ れ 世^セ の 中^{ナカ} よ （拍子不合）
 あ^ア ら ん け ぎ り へ （勢ヨク大キク） 周^{シュウ} 展^{テン} 志^シ ま っ け よ 鳴^ナ 動^{ドウ}

雲雀山

解題 藤原明臣豊成の女中將姫譏言によりて失はれんとしたるを、家臣乳母と心を合せて雲雀山の谷陰に隠しおきしが、豊成先非を悔ひ其行くへを尋ぬる中、偶此山に來りて邂逅することを作れり。當麻寺縁起得生寺古記等に據りて作ると見ゆ。曲中乳母の花を賣る條、芦刈の賣る條と甚しく似通ひたるは何れより何れを學びしにや。能本作者註文及び二百十番論目錄に世阿彌作とあれども明ならず。文中引歌多く辭句に古作の傳あり。粟田口猿樂記に中將姫とあるは此曲か又は同じく姫の事を作れる當麻かの古名なるべく、名寄に豊成とあるは此曲の別名なるべし。

諸ひ方梗概 全篇に互り品位有りて重くれず、麗しくして爽やかなるべし。

シテ 前は主君の境遇を悲み、悄然として花賣りに出づるものなれば位靜なるべし。初のワキツレとの問答は、若き女にあらざれば聲を稍下に取る。「いかに申すべき事の候」云々は前と更へて言ふ。「弊室に」云々は子方の氣を承けて聲高からぬやうに取り、確りとしたる味はひにて地味に諸ふべし。後はや、物狂に似通ひたる氣合にて、鮮やかにすつきりとあるべし。サシ以下十分に氣をかけてさらりと美しく諸ひ行き、一頭をえて「より一聲の調子に更へ、晴れやかに引き立たしむ。トモとの問答はすらりとしたるうちにも何處となく由有りげに言ふ。「花檻前に」云々は滞りなく、「召されまじく」云々は少しかけて出づるが宜し。「麻裳よい」は稍ゆるやかに「春霞」云々は一聲の調子にて暢び／＼とあるべく、サシにて改めて聊確りと起し、「げに面白き」云々を朗に扱ふ。クセの上端は豊に、舞上ダの「遠近の」はたつぷりと諸ふべし。ワキとの問答は眞實の心をこめて手堅く承け應ふ。

子方 調子高めにさらりと諸ふべし。

ワキ さして位を取るに及ばず。次第を首めて以下確りと勢好かるべく「やあいかにおことは」云々は先非を悔ゆる心を根に持ち、稍威有つてしみ／＼と然も粘らぬやうに言ふが宜し。

ワキツレ

おしなべてさ
らりと扱ふ。

地 前の下歌、上歌共にしほくとしたる姿をうつしてしめやかなるべし。後はシテの意氣を外さず、「紫染
むる山草の」は承けて暢びく、「月は見ん」よりは氣をかけてすらく」と扱ひ、「色々の」以下調子よく
牙えく」と語り行き、終の「人々や」にて聲を抜き、返しの「花すかぬ人ぞをかき」と位を鎮む。「花なき里に」
云々は承けて引き立て、サシ以下は軽々しくならぬやうに心す。クセは稍ゆるやかなれども淀むことなく「た
づきも知らぬ」云々は乗つて氣の抜けぬやうに附け、大事にさらりと扱ふ。「今
御身も」云々は更へて確りめに、キリは引き立て、喜びの心に語り納むべし。

辭解

横佩の右大臣

右大臣藤原朝臣武智麻呂の長子。勝實元年右大臣に拜せられしが、偶弟仲麻呂の讒奏により大宰員外帥に左降せらるゝ厄に遭へり、されど難波の別業に

留りて病と稱して出でず、こゝに在ること八年、仲麻呂の誅に伏せる後、また本官に復せ

姫君

此姫後に當麻呂の願主たり。古今著聞集、元亨釋書、當麻呂茶羅羅起等には豊成女とあれども、帝王編年記、尊卑分脈、和州社記、雪玉集等には其名を中將姫とせり。本朝烈女傳には姫幼時より聰明にして筆に秀で其技絶妙なりしかば十五歳

の時帝其才を賞して三位に敘し中將の名を賜ひたりと記せども

讒奏

言紀の國 紀伊の國の古名。雲雀山 日張山にも作る、紀伊國有田郡糸我村大字中番に雲雀山得生寺といへる寺あり。中將姫の遺跡と稱し、寺傳に

糸我村東北の山峰を鶴山といふ由傳へ、又當麻呂縁起にも一豊成公の姫十歳の時繼母の讒により葛城山の深谷

に捨てられ、又武士某に命じて更に紀州有田郡鶴山に誘はせ、密に之を害せしむ。武士罪なきを憐み命を助け

其地に柴庵を結びて養育す」とあり。されど此地は有田川の川口より約二里ばかりの海岸近き處にして、此曲に

作る大和紀伊の國境とは遠く隔りたれば、謠曲創作當時別に雲雀山につきての異説ありしには非るか。一説に

雲雀山を大和宇陀郡とし、但俗其山中の青蓮寺を以て中將姫の幽居せし紫雲庵の遺跡尼寺なりと傳ふれどこれ

も確實なる證左なし。侍従 思ふに作者の假托なるべし。此乳母に代なし ものを賣りて代價を得ること。寒竈に 以下「身な

らまし」ま

證左なし。

侍従 思ふに作者の假托なるべし。此乳母に代なし ものを賣りて代價を得ること。寒竈に 以下「身な

らまし」ま

證左なし。

侍従 思ふに作者の假托なるべし。此乳母に代なし ものを賣りて代價を得ること。寒竈に 以下「身な

で永正年間の序文ある閑吟集に載せたり。寒竈は貧しき家の竈の意。假に閑吟集の文字に従ふ。春の日 白氏文集の「春日遲日遲、獨坐天

前「寒竈に」云々の句に對す。弊室とは破れたる家居なれど、此語閑吟集には「幽室」、天和謠本、元祿謠本に

は共に「永日」とあり。これを弊室と語り更へたるは近世の事なり。思ふに原作は閑吟集に同じく「幽室」なりしな

る。家貧にしては 本朝文粹に「家貧親親しきだにも 身貧にしては親戚故舊すら疎遠とな

やとなり。文選に「富貴さなきだに 世を離れて隠れ住む身なれば、あるが上にも世間狭く埋れはて

命をいつまでと頼むもはかなしとなり。道せばきこは世間狭き意。身煙も絶えぐの 前の寒竈の

を埋れ草に喩へ、草の縁にて露といひ、身の行く末の頼み難きに比す。傾く嶺の 日の嶺に傾く

け、光の陰と詞を轉じ、光陰を惜みて他の憐みを乞はんと立ち出づる様を發す。梓の眞弓 梓にて造れる弓の美

倒し、日にかけて雲雀山と續け、雲雀の空高く上るに寄せて次句を出す。序辭なり。以下狩の興を述べ、まづ後拾遺集の歌「高砂の尾上の櫻咲きにけり外山の霞たすもあらなむ」に寄

せ、春の櫻狩を云はんとて拾遺集の歌「櫻狩雨は降りきぬ同じくは濡るとも花の蔭にかくれん」を引く。月

月は夜を 夜は明くとも月あれば猶夜の氣色を殘し、夜の中にも雪あれば夜の明くる如く覺ゆと云ひ續

しが、後其郡廢せられて北河内郡に屬せり。今の山田、牧野、川越の諸村に亙りて、古へ遊獵地たりしなり、新

古今集に「又や見ん交野のみの、櫻狩花の雪も春のあけほの」。又續日本紀に「桓武天皇延暦二年、行幸交野、

放鷹遊獵」とありて爾後禁野となり一般の私獵を禁止せられし。天の川 天の川といふ川の其傍を過ぐるに

かば禁野といひ續く。今も牧野村に大字禁野の名を存せり。伊勢物語に「交野御幸の時(中略)天の川といふ處に至りぬ」。續後選集に「天の川遠きわたりになりにつ

り交野の御野の五月雨の頃」。この天の川を天上の漢河にかけて空と續け、狩の音を借りて鷹を點出す。さつ

き待つ古今集の歌。五月を待ちつけて咲く花橋の香をかげは昔馴 故ある果古事記に「天皇(垂仁)三宅連等の祖、名

は多遲麻毛理(書紀には田道間守)を常世の國に遣はして澄岐士玖の迦玖の木の實を求めしめ給ひき、色あ

る花美しき花ごもを手折りて葉末に結ぶ露の如きはかなき身 思草思草には古來異説多く、定家は龍

膽といひ契仲も此説に傾き、九修關白は紫苑といひ、藻鹽草、藏玉和歌集には女郎花とせ 杜若卯の花の垣

り、現今の植物學者は本居宣長の考證に本づきて南蠻烟管と俗稱せるものなりといふ。 紫染むる山草古今集に「懸しくばしたにを思へ紫の根すりの衣色に出づなゆめ」とありて古代紫草

の根を染料としたることあり、又「紫の一本ゆるるに武藏野の草は皆がら憐れとぞ見

る」とありて紫草の生えたる近所は草も土も紫色に染めなすといふ俗 月は見ん「影も恥かし」まで和歌

説もあれば、紫に染めなす山の草と綴る。山草は草の名にあらず。 羽束師の森影恥かしを羽束師の森に掛けて森の下

草を云ひ起す。新續古今集に「(上略) 日頃へて古今集の郭公に「待つ日はさかす日比へて

ともあれは引歌なること 花檻前に百聯抄解に「花笑檻前一聲未聽、鳥啼林下涙難看」。花は欄干の前

と難しとなり。看難しをつき難しと作れ げにも盡きぬは涙つき難しといへるを承けてげにも盡き

るは、「看」を「着」に誤りたるなるべし。 深見草牡丹の異名。深の字を重ぬ。夫木抄に「紅の

色より紅の 深百合百合に同じ。紅の 深見草さきぬれば惜む心も浅からぬかな。」 心よせ

心を寄せ傾くる意に 人の心人心は色々にて知られず 枝は霜に橘は秋冬にも落葉することなげ

て俗にいふ「ひいき」。 目ざましぐさ草の名にあらず。「くさ」は種にて材料といふ程の意。新續古今集に「生ひ茂るねぶ

り。 忍草目ざまし種と云ひし筆法にて過去を忍 朝もよい朝もよいは「き」の枕詞、紀の關は和泉紀伊の

ふ材料といふ程の意を忍草に掛く。 朝もよい國境の古關、一名白鳥の關ともいふ。今鏡に

「朝もよい紀の關守が手束弓ゆるす時なくまづあめる君」。手束 入るさ入り 歸るさ歸り 花すかず

弓は手にとれる弓。弓を射るといふにかけて入るさと續く。 春霞古今集に出でた 心そらなる雁の縁にて空の語を出す。心に何物も無

句「款冬誤統暮春風」を引く。其名を負ふ如くは冬咲くべきを誤りて暮春に咲くと戯れ言へ 躑躅の花和

朗詠集の躑躅を詠せる句に「夜遊人欲尋來把、寒食家應折得驚」。意は躑躅の花は眞紅にして火に似たれば、

夜遊の人は尋ね把りて燭となさんとし、火を断ちたる寒食の家にては折り取りて始めて驚くことなるべしとな

り。こゝには此二句を一つにして綴り、驚くを承けて夢を出し、 心の花春の心 春の心春の心 櫻色

に拾遺集の歌に「花の色に染めし袂の惜しければ衣かへ憂きけふにもある哉」とあり。更衣の日は來たりし

あるに由るなるべし。斯く更へていふこと作者の技巧に非ずと見え、宴曲集 春を隔つる過ぎし春の隔

の夏といふ諸ひものにも「惜みしものを櫻色にそめしは花の」云々とあり。 春を隔つるたりたる意を

籠め、隔ての垣の「垣」の音 いつ唐衣いつから唐衣に掛け、杜若の五文字を句毎の頭字としたる業平

を借りて杜若につづく。 唐衣唐衣きつなれにしましあれば遙々來ぬる旅をしぞ思ふ

を引き、唐衣より遙々、 かほよ鳥面影を承けて顔佳き意と杜若の異名を顔佳花といふと寄せてかほよ

雉子の雄なりとも云 花にめて古今集の序に和歌の品々を記して「花をめで鳥 思ひの露思ひの

露の繁きとを兼ねて深見草に掛け、千載集の「人しれず思ふ
心は深見草花さきてこそ色に出でけれ」を胸に置きて綴る。人ば白玉
思ひ、と順次云ひかく。思は

内に云本朝文粹の勘解相公の文に詩經の辭を引き「情動於中、言形於外」といへるを
引き又熊野の詠其他に「思内にあれば色外にあらはる」とあるを云ひ更へて用ふ。今は昔に云

今は昔になるを奈良に掛け、萬葉集の歌「奈良山の兒手柏の二面かにもかくにもねちけ人の友」の辭を引く。此
歌第一句詠曲に引かれたるものは皆「奈良坂の」とあり。兒手柏は柏の葉の小兒の手に似たるによりて云へる

詞。歌は風吹く時其葉の裏表の著しく見ゆるを二面といはん序詞とせるなり。こ
ゝには歌の半を云ひて暗に二面なる佞人の爲に姫の苦しき山住みせる意を寓す。故里の云新古今集の歌

見てや止みなむ葛城や高間の山の峰の白雪を引き、故郷をよそにして葛城高間の嶺續きに遣られ、又この邊境
に來たるを、「來」より紀の路に云ひ掛く。「葛城高間の峰續き」といへるは當麻寺縁起にいへる葛城山の深谷を

指すに 霞の網云高く張りて小鳥を捕る網を霞網といへば、雲雀の縁に 目路もなき云續古今集に「問
の葉にみかくれて鴟の草ぐき目路ならずとも」前に霞網といひしより網の目を目路に掛く。目路もなきとは曲

谷の陰にて眼界のせばきをいふ。草ぐきは草ぐりよりにて鴟の草ぐりもならぬ如しと姫の痛ましき境遇を描け
るな 遠近の云古今集の歌。原歌末句「呼子鳥かな」。呼子鳥は深山にすみて鳴く聲物を呼ぶに おこと

り。かこと云かこつ 夏野云もはや姫の身の世に亡きを夏草に、姫を姫 涙の色云紅の涙などいふ詞あ
る。かこと云かこつ 夏野云もはや姫の身の世に亡きを夏草に、姫を姫 涙の色云紅の涙などいふ詞あ

る。諸天云もろくの天 照覽云見そなは そこそこも知らぬ云草木茂りて其處を何處
しるべとす 足曳の云山の山ふところ 山間。下の四鳥 空木云うつろ 四鳥のねぐら云孔子家

山云の鳥四子を産みて各巢立ちて別れんとするを母鳥の見送りて悲鳴せる故事あり圖書に 定めなき云不定
引用せられて、親子の悲しき別れを四鳥の別といふ。こゝには之を邂逅のことに用ふ。

が浮世の定則 夢ならば云新拾遺集の歌の句に「夢ならば覺むる現
なりとの意。夢ならば云新拾遺集の歌の句に「夢ならば覺むる現
其喜びを奈良の名木八重櫻の返り咲きする
に比し、咲きかへるを歸る道にいひ次ぐ。

装束附

前シテ (乳母侍從) 面深井又は近江女、鬘、無色鬘帶、襟淺黄又は白、着附摺箔、無色唐織着流、無色鬘扇又は無しにも。

後シテ (同) 前と同じ、但し唐織右肩脱ぎ、扇、挾花持つ。

子方 (中將姫) 鬘、鬘帶、着附摺箔、唐織着流。

ワキ (横佩右大臣豊成)

風折烏帽子、着附厚板、白大口、單狩衣又は長絹にも、腰帶、扇。
ワキツレ (中將姫從者及び豊成從者) 着附無地熨斗目、素袍上下、小刀、扇。

四番目
畧三番目

雲雀山

四月

トワシチ
モキテ方

中將
乳母侍
横右大臣
從從者
男

者ヨシ

早ツレ河ハ (位輕ク流ミナク)

かのまゝの者ハ。奈良の都横佩の太
 臣トヨナリ成コらよは申も者ヨシのトモ。さても
 姫君ヒメノミコをチ下チ人ヒト持テらふコト。さるノ人ノの護
 奏ソウよリ。大和紀ヤマトキの國の境サカイある。雲雀
 山クニノヤマをヒ申セるコトの旨をヒ。程ほどよク。れ
 まご。申せ。供ツケ申せ。しテ。さら。なら。ば。い。まし。て。い。まし。び

雲雀山

申さぐれおの存。紫の庵を結びかきく
 いたさつ申ひ。さる程は侍従を申を乳母。
 春の本との花や手折り。秋の草花を
 取りて里よ出で。往來の人よこゝを代
 あがの姫君やまごころ申ひ。あも侍
 従や呼び出。里へ下なごやが存。い
 の申さぐれおの事。の。何事よかぞ

花を手折り

(大キク)

(氣ヲ更ヘテ)

静ニ抑メテ

コキツレ(サラリ)

ニテ(閑雅ニ)

あも又里へ出でく。からば姫君
 子方サシ上(調子高ニサラリ) 暇や申へ。やごとく暇を申
 里へ出でく。の。申さぐれおの事

コキツレ(サラリ)

ニテ(前ト更ヘテ換マシヤカニ)

子方サシ上(調子高ニサラリ) ヨク(抽子不台)

の。あも里へ出で。頓て帰らる
 け。や寒。竈の煙絶えて。春の日い
 暮。難。難。室の燈消えて。秋の
 夜猶長。家負の。親知まへく。

小言

賤（カヘテ）の身（カヘテ）よ（カヘテ）く（カヘテ）人（カヘテ）疎（カヘテ）親（カヘテ）も（カヘテ）だ（カヘテ）も（カヘテ）
 疎（カヘテ）く（カヘテ）あ（カヘテ）ら（カヘテ）い（カヘテ）る（カヘテ）よ（カヘテ）そ（カヘテ）く（カヘテ）い（カヘテ）そ（カヘテ）訪（カヘテ）ふ（カヘテ）か（カヘテ）
（カヘテ）お（カヘテ）あ（カヘテ）ら（カヘテ）だ（カヘテ）い（カヘテ）お（カヘテ）あ（カヘテ）ら（カヘテ）だ（カヘテ）い（カヘテ）お（カヘテ）あ（カヘテ）ら（カヘテ）だ（カヘテ）い（カヘテ）
 此（カヘテ）の（カヘテ）際（カヘテ）に（カヘテ）は（カヘテ）む（カヘテ）身（カヘテ）の（カヘテ）山（カヘテ）深（カヘテ）み（カヘテ）から（カヘテ）だ（カヘテ）
（カヘテ）心（カヘテ）の（カヘテ）あ（カヘテ）り（カヘテ）も（カヘテ）せ（カヘテ）で（カヘテ）。た（カヘテ）ゞ（カヘテ）道（カヘテ）せ（カヘテ）ぎ（カヘテ）き（カヘテ）埋（カヘテ）草（カヘテ）
（カヘテ）露（カヘテ）ら（カヘテ）ま（カヘテ）で（カヘテ）の（カヘテ）身（カヘテ）あ（カヘテ）ら（カヘテ）ま（カヘテ）り（カヘテ）露（カヘテ）ら（カヘテ）ま（カヘテ）で（カヘテ）の（カヘテ）
（カヘテ）身（カヘテ）あ（カヘテ）ら（カヘテ）ま（カヘテ）り（カヘテ）煙（カヘテ）も（カヘテ）絶（カヘテ）え（カヘテ）絶（カヘテ）え（カヘテ）の（カヘテ）
（カヘテ）

か（カヘテ）く（カヘテ）煙（カヘテ）も（カヘテ）絶（カヘテ）え（カヘテ）絶（カヘテ）え（カヘテ）の（カヘテ）光（カヘテ）の（カヘテ）影（カヘテ）も（カヘテ）惜（カヘテ）
 一（カヘテ）れ（カヘテ）も（カヘテ）よ（カヘテ）も（カヘテ）その（カヘテ）情（カヘテ）や（カヘテ）頼（カヘテ）ま（カヘテ）し（カヘテ）と（カヘテ）草（カヘテ）の（カヘテ）
 一（カヘテ）は（カヘテ）ほ（カヘテ）そ（カヘテ）ち（カヘテ）や（カヘテ）ひ（カヘテ）ち（カヘテ）た（カヘテ）と（カヘテ）い（カヘテ）と（カヘテ）又（カヘテ）里（カヘテ）へ（カヘテ）い（カヘテ）そ（カヘテ）出（カヘテ）で（カヘテ）よ（カヘテ）
 け（カヘテ）れ（カヘテ）又（カヘテ）里（カヘテ）へ（カヘテ）い（カヘテ）そ（カヘテ）出（カヘテ）で（カヘテ）よ（カヘテ）け（カヘテ）れ（カヘテ）
（カヘテ）

（カヘテ）傾（カヘテ）く（カヘテ）山（カヘテ）嶺（カヘテ）の（カヘテ）雲（カヘテ）雀（カヘテ）山（カヘテ）傾（カヘテ）く（カヘテ）嶺（カヘテ）の（カヘテ）雲（カヘテ）雀（カヘテ）山（カヘテ）
（カヘテ）よ（カヘテ）る（カヘテ）や（カヘテ）雲（カヘテ）踏（カヘテ）あ（カヘテ）ら（カヘテ）し（カヘテ）こ（カヘテ）れ（カヘテ）の（カヘテ）横（カヘテ）佩（カヘテ）の（カヘテ）
（カヘテ）右（カヘテ）大臣（カヘテ）豊（カヘテ）成（カヘテ）と（カヘテ）ら（カヘテ）我（カヘテ）が（カヘテ）事（カヘテ）あ（カヘテ）り（カヘテ）の（カヘテ）狩（カヘテ）
（カヘテ）

場カの四季シキの遊ユも時トキをりふの興キョウを
 増マす上秋梓シラカシの真マら朗カニ運ビヨク春ハルのハ梓シラカシの真マら
 春ハルの霞カスミむみ山の櫻サクラ狩カゲ雨アメの降フりま
 ぬ同ドウくトの濡ヌもも花ハナの本ホノ蔭カゲは宿ヤドらん
 借カ又マタ月ツキの夜ヨを残ノコも雲クモのあくるカク野ノ
 の野ノ林ハヤシ野ノよつぐ天アメの洞ツツミ室ムロもぞ
 雁カシの聲コエの居イるトキ空ソラもぞ雁カシの聲コエの居イる

シテサシ上(夾カニスツキリト)
 ヨク(拍子不合)

さつき待マつ花ハナ橋ハシの香カをかげカ昔ムカシの人ヒト
 の袖スズメの香カぞカまカげカよカ昔ムカシも君キミの為タメ故コト

ある果コノミを集ツめつカ常トコ世ヨの國クニまで行ユクき
カん上上(氣ヲカケテ麗ヘシク)

一ヒトぞかカわカれカもカ君キミのカ色イロあカるカ

花ハナや手テ折ヲつカ葉ハ末ハシは結ムスぶカ露ツキのカ声コエ

身ミや残ノコりカやカ思オモひカくカいカろカくカのカ

頃トキやカえカてカ咲サくカ卯ウのカ花ハナのカ杜ツバ若タラ
前ヲ取ケテ暢シクト地チ紫ムラサキ深フカ

能三番目ノ時
夜半ノ
静

地神子
親手
他
（前ヨリ運ビヨク）

聲まで身のよは聞く哀なるあきて
ぞ花よめで鳥や羨む入心思の露も
深見草の志げみの花衣野がわけ
山よ出てるさも更よ入白木の思ハ
うちよあひびる色よあやあらぬ
（朝カニ立テ）
（三上）
あもても馬ねーまあてらーあ
今昔よ奈良坂や使手ガーもの二面

舞臺

七

とよもかくよむ古里のよそあよあつて
葛城や高向の山の嶺つれよ
紅の路の境ある雲雀山よ隠れ居て
霞の網よかり目踏もあき谷あげの
上
賜の草ぐさならぬ身の露よ置かれ
雨よりたれかくても消えやらぬ身
果ぞいたるき遠也の
（袖子不倉）

舞臺

中ノ舞

七

地上

(長閑ニ調子ヨク運ンデ)

拍子合ルニ
打上(中)

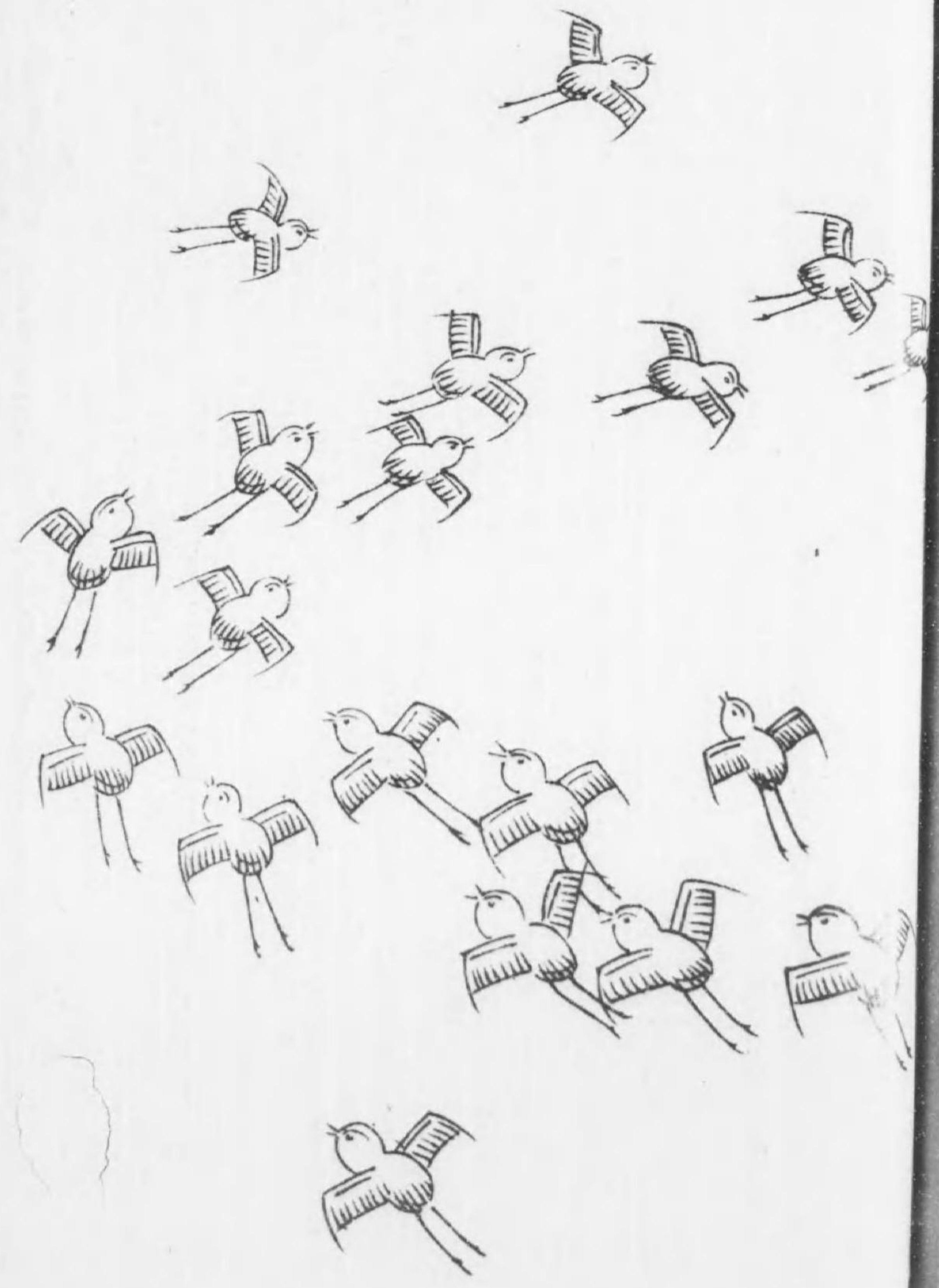
合方注意
降らん終句ニ字
ノ節ヲ本地一句分
ニ讀ムヲムシ

なづきも知らぬ山中はおぼりかなくも。
 呼子鳥の雲雀山鳥待ち給らん。
 いざや帰らんいざや帰らん
 おいん乳母の侍従もてんあまが。豊成
 ちび目もあはしてあまが。たても我が姫よー
 あま者の讒奏よもあまが。科
 あま由や聞か後海あまが。思ふまで。

おいんあまが計らうて。此雲雀山
 の谷陰よ紫の庵を結び隠し置きた
 る。聞かまも真からぬ所よ。今
 おいんあまが思ひぬ。姫いら
 くらあまが申さく。申さく。行と
 も覺えぬものあま。人のかごとを法用あ
 ありて。あまが給ひ。中將姫の行よ。此

又ハ
中將姫

284
2



終